



THE DAMN OTHERS

エロゲー  
+ 2

UIn Official  
Dojin-Shi

YUKIRIN  
武藤礼恵



# THE DAY OTHER

レキ×シ

UnOfficial  
Dojin-Shi

YUKIRIN  
武藤礼恵

# THE DAY OTHER

武蔵礼堂

Un Official  
Dojin-Shi

YUKIYAN  
武蔵礼堂

お兄様は、私を選んだ。  
私——此花美奈斗を。  
私は、それに応える。

お兄様の命じることであれば。  
何だって、応える。  
優しいお兄様。

大好きなお兄様。  
死ねと言われれば……今なら死ねる。  
殺せと言われれば……今なら殺せる。  
でも、優しいお兄様は絶対にそんなことを言わな  
いし、命じない。

だって、本当に優しいから。  
ちよつと困った癖があるけれど、それが無かったら、私とお兄様の関係はこんな風に深くならなかつたと思う。  
だから、この困った癖があつて本当に良かったと思つているの。

「ねえ……お兄様あ♥」  
「美奈斗……んー、可愛いなあつ」

「やんつ♥ お兄様あ……エッチい♥」  
「エッチつて、いつも通り普通に言つていただけじゃないか」

「だ、だつてえ……そ、そのお……や、やつぱりい、め、面と向かつて言われるのは……」  
「恥ずかしい?」  
「……んもお、そ、そういうのを聞くの、間違つていますよつ!」

ちよつと恥ずかしくて、怒つてみる。  
そうすると苦笑いしながら、お兄様は……私の身体を触ってくるの。

「そうそう。美奈斗は、やつぱりそうやってツンつて、すまして見せたり、怒つたりしない」と  
「え……じゃ、じゃあ、その、す、素直なのは……だ、ダメですかあ……」  
「あ、い、いや……そういうことじゃなくて、うーん……難しいなあ。俺の好みを伝えるつていうのは……なあつ」

そう言いながら、私の身体に……やつと手を伸ばしてきました。  
ああ……そうそう。こういうのが……好きい♥

「やつ! だ、ダメですよつ……ま、まだあ……礼拝時間なんですからあつ!」

「そうです。私は、シスター。もつとも、見習です。今の学校を卒業したら、お兄様と一緒にヨーロッパに行くことになると思います。」

国内よりも、海外の学校で、ちゃんとした資格を取つて、私もお兄様のパートナーがつとまるようない立派なシスターになりたいのです。

「いいじゃないか。どうせ、教会の方には人が来ないんだからさあ」  
「そ、そんなこと言つて……この間大変な目に遭つたの忘れちゃつたんですか!」

「礼拝時間に……私とお兄様は、つい調子に乗つて……エッチを始めちゃつて……結構、ハードに始めたところに、私と同じ学校の生徒がやつてきたの。その娘は、その……悩みがあつて神父であるお兄様に戒告していたわけだけれど。」

「何だよ……そんなにこの間の困つたのか?」  
「こ、困りますよおつ! だ、だつてえ……」

その娘の話は……何だか、昔のお兄様と私の関係みたいで……その、え、エッチするんだけれど、それだけじゃすまなくて……もつともつと恥ずかしいことさせられちゃつて……  
その拳げ句、その娘のライバルつていうのが、幼馴染みつていう関係で、できれば、そのライバルとも仲悪くなりたくないとか。  
ホント、どつかで聞いた話なのよねえ。

「だ、だつてえ……そんな真面目な話なのに、お兄様つたら、わ、私とお、え、エッチ……しようとするんだもんつ」

「そう。懺悔室の向こう。畏まったお兄様の顔の向こう側で……お兄様は、私のお尻を撫で回していました。いつもの通りです。でも、質問者は真剣です。そんな真剣な女の子の悩みを「ふんふん」とか「ほんほん」とか……如

「何にもかしまつて聞いてますよー、つていう態度は、私としては全然感心しません。」

「いいじゃないか。それよりも、美奈斗は困らなかつたの? セツかくいい具合に気持ちよくなつていたのに?」

「わ、私は……が、我慢できましたから、い、いいですう」  
「嘘ばつかり。その後、俺がどれだけすつごい目に遭つたか分かつてない」  
「やつ! だ、だつてえ……そ、それはあ、その……その……あの……お、お兄様のお努めじゃありませんか!」

「そうです。あんなのは夫婦の営みの一部です。た、確かに、ふたりとも学校を遅刻するぐらい楽しく交つたのは事実ですし、それを姉さんに——美咲姉さんに宥められたのも確かです。でも、それは私とお兄様の問題で。」

「いやあ、それはどうかな? 俺には美奈斗だけの問題だと思つぞ」  
「お、お兄様あつ! だ、だつて、始めたのは、お兄様で」  
「覚えてないか! 確かに俺のせいだつたら、ハイハイ、つて言つてるところだけれど……さすがに全力で俺のせいじゃないからなあ」  
「そ、そんなのお……わ、私のせいだつても?」  
「思い出せない?」  
「はい。私のせいじゃありません」  
「んじゃ、ビデオ見るか?」

お兄様は、携帯音楽プレイヤーを取り出します。最近のお兄様のこういうアイテム(姉さん曰く「サイバーガジェット」というらしいのですが、私にはちんぷんかんぷんです)は、色々あつて……そして、私を確実に困らせるのです。

「ほれ……これがそれ」

◆ ◆ ◆  
「ねえ、お兄様」  
「ん? 何だ、美奈斗」

お兄様は聖書を読んでいる。  
日曜日の説教のための予行だ。若い神父さんが来たという噂のせいで、最近妙に説教を聞きに来る人が増えていたので、一生懸命なのだ。  
でも、私はその原因を知っている。だから、これ以上、お母さんを必要以上、街に行かせるのを止めさせないよ。

「お忙しいでしょうけれどお、その……わ、私のお話も聞いてくださりませんか？」  
「でもさ、明日の夜とさ、日曜日の二回やるからさあ、同じ話は苦が無いだろう？」  
「神の言葉ですから、苦が無いとか何とかってあり得ない話ですよ」

「そんなのだ。解釈論の問題なら、同じ話でいいはずなのだ。お兄様は一生懸命。だから……私は好きになった。」

「でも、それはそれ。これはこれですわ。さ、最近……その……し、してませんよねえ」  
「何を？ 夜のお勤めはしてるじゃないか」  
「そ、それはそうですけどお、お、昔みたいに……そのね、姉さんとお、お、お兄様を取り合いたい頃みたいなの」  
「取り合っていた頃ねえ」

ほんの二ヶ月前まで、私は実の姉さんとお兄様を取り合っていました。その頃は、協定を結んだ戦争みたいな、お兄様をどれだけ誘惑できるか……みたいなことをしていて

「要するに、久々にここでエッチしたくなった、でOK？」  
「そ、そんな……ストリートに」  
「ストリートもへったくれもないじゃん。結局するんだから」  
「で、でも、その……お、お母さんとの約束」  
「美奈斗が破りたいなら、いいんじゃない？ 俺は構わないし、俺は美奈斗がOKなら全然気にしないって言うか……すぐしたい」

そうやって、股間を私に示します。

あんっ♡ お、オチンチン……パンパンになっちゃってますっ♡

「ん……お兄様あつ♡」  
「キス、したい？」  
「え……あ……は、はい♡」  
「久々だもんなあ、ここでセックスするの。俺も結構興奮しているよ」  
「んんんっ……お兄様あつ♡」

神の偶像の前で、私とお兄様は、まるで獣みたいに、互いの唇を貪り合うの♡ ちゅーちゅーっ、互いの口の中の唾を貪って。

「いやらしい奴」  
「お兄様がいやらしいのですっ」  
「んじゃ、本当かどうか試してやろう」  
「んああうっ♡ お、お、お兄様あつ！」

お兄様に抱きかかえられて……私はお兄様の膝の上に載せられてしまいます。

「美奈斗には言っただけなよなあ……俺、向こうの学校で一番得意だったの、何だか分かるか？」  
「え……い、いいえ？」  
「異端審問さ、魔女の可愛い美奈斗」

そうして……私の股の間に膝を入れ、私の身体を抱きすくめます。

「後半は身体に触れるのが反則だからさあ、時間が掛かるけれど、魔女役の娘はみーんな、俺が陥落させたんだよー」  
「そ、そんな、い、いやらしいことお、じ、自慢にするんですかっ！」  
「いやらしいことは一つもやってないよ。だって、みんな嫌がるんだよ、俺が怖いってさ」  
「そ、それは……その……まあ、い、いいですよっ」

確かにお兄様の前では丸裸同然。  
私に反論、反撃なんかできないから……ただ、ずっと大人しく愛撫を甘受するだけ♡

「ん……美奈斗、太った？」  
「お兄様！」

「あ、ご、ごめんごめん！ ち、違っつて、何かむちむちしていやらしくなったなあ、つて思っただから」  
「そ、そういうのは太ったじゃないでしょ！」  
「ふくよかになった、でも怒るだろ」  
「当たり前です。せめてグラマーになったとでも仰ってください」  
「そうだな。ごめんな、相変わらずデリカシーに欠けてて」

そ、そんな風に謝られると、ちよ、ちよつと、は、恥ずかしくなっちゃう♡  
「んで、そのグラマーの元は……脇腹」  
「ち、違います！」

ほ、ほんとは、ちよつと増えちゃったから……ダイエツトしないといけないのよねえ。

「んじゃ、やっぱり、こつちだな」  
「ん……んあうっ♡」  
「むう……エロエロ」

「お、おっぱいいい……も、揉んじゃ……だ、ダメですっ♡」  
「ま、またあ……お、おつきくなっちゃうっ♡」  
「うん。おつきくしたいなあ」

「だ、ダメですっ！ だ、だつてえ、お、お洋服う、き、着られなくなっちゃうっ♡」

そう。体重が増えた悩みよりも、こつちの方が切実。

もう、姉さんと普段着や余所行きのやり取りが出来なくなりつつあるんだからあ。

「いいじゃん。服ぐらい。俺が新しいの買ってやるよ」  
「だ、だつてえ、ぶ、ブラも一緒に買わないといけななんですよおつ。そ、それもお、か、可愛くないのになっちゃうんだからっ！」

おっぱいが大きければ大きいほどイイなんていうのは、男の人の下らない幻想なんだからっ！

「まあ、その辺の悩みは後で聞いてやるからさあ……教会エッチ禁止されてからの俺の感想言ったい？」  
「え……あ、ど、どうぞ」  
「エロシスター」

「え！わ、私なんですかあつ！」  
「当たり前じゃん。なんだよ、このばつっばつっばつのおっぱいっ！乳輪まで浮き出てるみたいじゃないか！」

「そ、そう言ってお兄様は乳房の突起の辺りに指を這わせていきます。  
その途端、私の身体に甘い電気が流れていきます。そうです、いつもいつもやっっている……あのエッチの甘さ。」

「ふふふ……美奈斗、昔よりずっと素直に顔に出るようになってたよな」  
「え……えへえっ♡ い、いやらしくてえ……ご、ごめんないいっ♡ で、でもお、う、嬉しいもん♡♡♡ 気持ちいいもん♡♡♡ だ、だからあ、か、顔出してえ、いいでしょおっ♡」

「そういう顔をエロ面っていうんだぜ」  
「え、エロ面……」  
「そう言われるとかなりシヨックです。え、エロ面ってえ……そ、そんな日本語お。」

「あはは……そんな気になる？」  
「な、なりますよお。そんなに……はしたない顔お、してました？」  
「んじゃ、鏡の前、行こうぜ」

鏡の前——この鏡もたたくさんのエッチでお世話になってます。というより、この教会にあるアイテムはなんだかんだで、お兄様とのエッチに使われているのです。  
「さてさて……普段だった俺が弄りたくて、でも美奈斗には見えにくい……とつても、恥ずかしい場所を見て貰っているわけだが、今日は違う」  
「う……」

「今日は、顔を見てほしい。正常な鏡の使い方だよなあ」  
「う……そ、それですけれどお」  
「ま、試してみれば分かるよな」

「そう言ってお兄様は、私のおっぱいを下から持ち上げました。」

「ひあああああつ！お、おに、お兄様あつ！」  
「な、何だよ、い、いきなりの大声出すなよおつ！」  
「だ、だつてえ、お、おっぱいいい……だつて思わなくてえ」  
「え？あ、何？いきなり肝心の場所が良かった？」  
「え……あ……」

「あうう……ぼ、墓穴う。  
で、でもお……そ、そう思うじゃない。エロ面とか、何とか。それで、お尻い、撫でられてたら、きつとパンティの中に、手入れられたりするって思わないですか。」

「思わないって。美奈斗お、お前ホントスケベになっちゃったなあ」  
「う……ううう……お、お兄様のお、意地悪ううつ！」  
「そうしてポコポコ殴ってみる。」  
「何だか、世の中で言われている、いわゆる“バカップル”の楽しさが分かったような気がしました♡」

「はいはい、そこまでな。んじゃ、じつとしてな……ふふふ」  
「お兄様のくぐもつた笑い。」  
「うう……そ、そういう笑いをするお兄様は、ちよつと最低の陵辱ハンターにクラスチェンジしちゃうから……もお、まともじゃいられないかも。」

「正面からしておこうな」  
「あ……は、はいいい♡」  
「私のスカートをたくし上げて、顔をスカートの中へ♡そのままだ腕は、おっぱいを求めて伸びていくわけです。」

「んっ……んあううっ♡お、お兄様あつ♡」  
「鏡見てろよ……この状態だと、俺が確かめられないから」  
「本末転倒——これで、私が『全然、エロい顔なんかしてませんでしたよ』って言つたらどうするつもりなんだらう。」

「美奈斗はそういう嘘吐きじゃないからな。さすが、神に仕える女の子だ」  
「うう……そういうところで、戒律を出してくるのって……」  
「七罪の一つ、偽り。簡単だよねえ、七罪の中では一番簡単かも。何しろ、口から出た瞬間、終わっちゃう」  
「じゃあ、この行為はなんでしよう？」  
「淫欲？それとも、強欲？怠惰？」  
「うん、多分、全部。」

「んあうううっ……んふうっ♡お、お兄様あつ……お、おっぱいいいっ、コリコリい、し、しちゃうのおっ……い、痛いですうっ♡」  
「ん、痛い？乳首、張ってる？妊娠でもした？」  
「ち、違いますうっ！さ、さつきからあ、す、擦れてるんですう」  
「そうか。妊娠したんだつたら、嬉しいんだけれどなあ」

「また……この話題。」  
「だ、だからあ、あ、赤ちゃん、つ、作っちゃ……ダメですう」  
「どうしてさあ……俺は早く美奈斗を孕ませたいよお」  
「だ、だつてえ、あ、赤ちゃん、できたらあ、そ、そのお……が、学校お、い、行けなく……なっちゃうからあ」  
「そんなことないさ。みんな結構気付かないみたいだぜ。いいじゃん、ばれたつて。あ、ばれた方が俺としては面白いかな」  
「んもあつ！お、お兄様あつ！」

「冗談冗談——と笑うけど、冗談じゃなかったりする。お兄様は……本気で私を妊娠させたがつてる。それを、私は何とか押し止めてあげたい。ううん、押し止めてもられているのが奇跡かも知れない。」  
「だつて……お兄様が本気になったら、絶対に無理。そう、まだ、私の我が儘の方が強いだけ。」  
「お兄様の本気モードは、私を溶かす。私を狂わせる。私は……従うしか無い。私が必死に取り繕った飯面なんか何の意味も無い。」  
「それぐらい、お兄様は……ううん、それぐらいお兄様のこと、大好き♡」

「ん……もしかして、困ってる？」  
「え……あ……そ、そんなことは……」  
「嘘ばかりだなあ、美奈斗は……しようがないなあ。分かってるよ。俺が美奈斗の嫌がることするわけ無いだろ……」

そう……分かる。

お兄様は、私が本気でいやがることは、しない。絶対に。  
だから、私が望むまで……こういうことをするんだと思う。



「はい、どっちが悪いでしょう？」  
「あ……あうう……わ、私い……ですう……」  
「はい、正解。んじゃ、どうやってお仕置きしようかな……うん」

お兄様のいやらしい視線。  
こうなったお兄様を止めることは……全然、できないのは分かっている。

「さて……どんな風にいじめようかなあ」  
「うう……こ、恐い……」  
「恐くないようにしようね……はい、おいで」

お兄様の手招き。

あたしは、黙ってお兄様の方へ。  
腰を抱きしめられ、私はお兄様の膝の上。  
あうう……こ、こうされるとお、こ、興奮しちゃうう……んあううっ……お兄様のお……匂いと体温が、すっごく好きい……

「ふふふ……これ、好きか？」  
「え、あ……は、はい……だ、大好きですう……ん……」  
「も、も……お、寄っていいですか？」  
「股の間に足入れちゃうよ？」  
「そ、それでえ……い、いいですうっ……」

股をはしたなく開いて、お兄様の身体にぴったりと私を寄せます。  
すると……当たり前のように、おっぱいを鷺掴みされちゃうう……

「んあううっ……お、おに、お兄様あつ……」  
「おっぱい責めつて、この間やったよな？」  
「うう……あ、あの後お、ち、乳首い、ヒリヒリしたからあ……も、もお、いいですうっ……」  
「そっかあ、ちよつとイジメ過ぎたか？」  
「お兄様のプレイは、全部、ヤリスギですう……んもおっ……あううっ……」

あ！だ、だめえっ……あ、あそこお……んふうつき、気持ち……よ、良くなつちゃううっ……

「んじゃ、何時も通りかなー」

「え……あ……うう……ま、またあ……」  
「ううん、久々に……美奈斗をいっばいいじめたよ。いいかな？」  
「え……え……ま、ま、まさか……その……ま、また……あれ？」

「うん。アレ……オムツね。んで、今日のはさすがに美奈斗が全面的に悪いでしょ？」

「う……うう……そ、そうですけどお」  
「んじゃ、美奈斗の敏感なの、両方ともだよ……いいね？」

「りよ……りよ、両方お……」  
「うん、そうさ……両方ともだよ」

両方……いじめられるのお、久しぶりい……  
あ……あうう……だ、ダメえっ！だ、だつてえ……りよ、両方されちゃつたらあ、ま、またあ、ふ、普通にい、せ、セックスう、したくなつちやいますうっ……

「でも、ダメ！両方つたら両方ね……美奈斗のスケベな穴を徹底的にいじめる。明日、朝、教会に来ること……いいね」

「は……はい……で、その、きよ、今日は……」  
「今日もしたいの？」

「あ……あうう、そ、そうじゃなくてえ……え、あ、そ、その、そ、それは……し、した……い……ですう……」

お兄様が含み笑いをする。  
あうう……が、我慢……できなくなつちゃうう……い、いやらしいのお……し、して欲しいですう……

「んじゃ、確かめてからね。ヌルヌルしてたら、エツチしてあげる。その代わり、いっばいヌルヌルしての、見せるんだよ」  
「は……は……いい……」

私はスカートをたくし上げます。

あうう……あ、甘つたるい……え、エツチな匂い、きつくなつちゃうう……さ、さっきのビデオお、見たのでえ……ちよつと感じちゃつたのかも……うううっ……

お兄様も、鼻を鳴らしながら、私のパンティの中に両手を入れてきて……前と後ろお……そ、その、お、おま、オマンコとお、お、お尻い、一緒にい、指をめり込ませていっちゃうですうっ……

「声、出しちゃダメだよ……まだ、確かめてるだけだからね」  
「うう……だ、出さなつてえ、い、言われてもお……き、気持ち……い、いい場所お、い、いじ、弄られてえ……んふうっ……」

「まだチエックしかしてないじゃないか。そんなに気分盛り上げてると、いじめちゃうぞ」  
「うう……わ、わか、分かりましたあ……」

この場合の「いじめちゃう」は、本当にイジメられちゃいます。そう……散々焦らされて、最後はエツチしてくれないんです……

そんな……おあずけされちゃつたら、あ、朝までえ、お、おな、オナニーしても、た、多分、満足いかないですう……

「そうそう……そういう目に遭いたくなければ、黙って俺のチエックを受け入れること」  
「は、はい……」

お兄様の意地悪う……わ、私い、こんな風にされるとお、あ、後でえ、いっばい感じちゃつて、狂ったほどイカされちゃうのお、分かってるからあ、こんな意地悪を言うんです……酷い。

「ふふふ……オマンコも随分熱くなつてるな」

「は……はい……ぱ、パンティい、ヌルヌルしてえ、気持ち悪いですう」

「嘘吐き。ヌルヌルして気持ち悪いんじゃないか、気持ちよくてヌルヌルしちゃつたんだろ？んじゃ、

「コッチの穴は？」  
「んあううっ♡ お、おに、お兄様あつ♡」

「や、やだあつ……こ、声え……出ちゃううっ♡  
どうしてもお……こ、声があ……出ちゃううっ♡」

「ん？ どうしたんだい、美奈斗お。俺が弄っている場所が、いいのかわ？」

「うう……うう……い、いじ、意地悪う♡」  
「何処弄ってるのかなあ？」  
「うう……ま、またあ、そんなことお、い、言わせるんですねえ……んもお、お、お兄様つたらあ……しよ、しようのない人お♡」

「何回だって言わせるのが好きだよ……特に可愛い美奈斗の声なら、はしたない言葉を何回言わせてもいいなあ」

「うう……い、意地悪う♡」

「ま、前の方の……お、おま、オマンコの方を弄っていた指まで……う、後ろお……お、おし、お尻の方にい、き、きちやつてえ♡」

「さあ、言つてご覧。俺の可愛い美奈斗の声で……恥ずかしい言葉、言つてご覧」

「うう……うう……い、いじ、意地悪う♡」  
「うう……うう……い、いじ、意地悪う♡」  
「うう……うう……い、いじ、意地悪う♡」

「でも……ヌルヌルになつてるかな？ それは確かめさせて貰うよ」

「お兄様の指が……ゆつくりと、わ、私のお尻の穴に……は、入っていきます。い、いつもとお……お、同じように、せ、責められているんですけれどお……や、やっぱりい、す、好き♡」

「ふふふ……やっぱりヌルヌルだよ。いやらしいアヌスだよなあ、美奈斗のケツ穴あ」

「そ、そんなのお……お、おに、お兄様のお……せ、せい♡」

「分かつてるよ……でもさ、美奈斗がここでよがんなければ、こゝまでイジメ回すことも無かつたなあ」

「そ、そんなのお……だ、だつてえ、き、気持ち……い、いいんですものおつ」  
「だから、いっぱいしちゃうたんじゃないか。可愛い

美奈斗をもつともつとエッチしてあげたくなくなって……でも、ちよつとしすぎかなあとか」

「うん、意地悪だよ……こんなに可愛い美奈斗の肛門がさあ、めくり上がつちゃうほど……いじめちゃつてねえ……可哀想お」

「やっ、やああつ……そ、そんなあ、や、優しいい、な、撫で回しい、だ、ダメえつ♡」

「うん……イイ反応。そんな反応されちゃうとお、ほら、もつと弄りたくなるじゃないか。そんな可愛い反応ばかりすると、美奈斗を妊娠させる前に、可愛いケツ穴拡張で、フィストファックさせちゃうぞお」

「ふい、フィストお……ファックう……だ、だ、だめえつ！ い、幾らあ……お、おに、お兄様があ……へ、変態さんだからつてえ……わ、私の身体あ、お、オモチャにしすぎ♡」

「もう指が四本入っているのにさあ、今更なんじゃない？」

「だ、ダメですうっ！ ん、んもお……お、お兄様のお……へ、変態♡」

「まんざらでも無い癖に……ほら、これで三本入り口辺りは、俺のチンポサイズと一緒かな？」

「お、お尻の穴にい、きよ、強烈な感触……だ、ダメですうっ♡ い、いき、いきなりいっ……ん、ん、んおおおおおつ♡」

「あはは……さすがに、キツそうな顔されると、困るなあ。んじゃ優しくね……優しく。可愛い俺の美奈斗……もつといじめてあげるね」

「あ……あう……お、おに、お兄様あ♡」

「でも、明日の朝はちゃんと俺のお仕置きを受けるんだよ……分かつたね」

「は……はいい♡ お、おね、お願いしますう……わ、私をお、お、お仕置きい、し、して、く、ください♡」

「そうして、今日の夜は普通のセックス……あ。あんまり……普通じゃないですね、お尻で、エッチしちゃうんですから。」

「いつも通りの夜の営みを終えて……お兄様にいっぱいいっぱい気持ちよくして貰いました。朝を迎えるのが恐くなるくらい、気持ちよく……♡」

翌日の放課後。ハードな責めが終わる時間。控えの間で、お兄様は私が着替え終わるのをニコニコしながら待っている。

「そ、そんなに……う、嬉しそうにしないで……」

「だつてさあ、楽しみじゃない。美奈斗がどんな風に仕上がっているのかつてさあ」

「そ、それは……その……んもおつ！」

「また……あのエッチな下着、ううん、下着なんて絶対に呼べない代物——だつて、これえ……は、排泄してもいいようにできている——を身につけての学校生活。 たつた一日。」

「されど、一日。」

「うふふ……美奈斗がさあ、声を殺しながらお漏らししているのつてさあ、すつごく興奮するだよえ」

「うう……だ、だからつてえ、じゅ、授業中にさせなくともお」

「授業中だからいいんじゃないか」

「お兄様の意地悪う。ほ、本当に誰かに気付かれちゃうう。」

「美咲あたりは気付いていたかもなあ」

「ね、姉さん……じゃ、しよ、しようがないですう」

「そうだよなあ……双子つてテレビバスマミたいのあつて話だから、美咲も感じてたかもなあ」

「うう……そ、そんなのお、し、信じません……そ、そんなのお、あつたらあ、ね、姉さんに……も、申しわけが立たないです」

「そんなに気に病むなよ。美咲だつて、祝福してくれているんだからさ」

「かつて、私と姉さん——美咲姉さんとは、お兄様を取り合つた中です。」

「ある種の協定、といつてもそんなに大げさな話じゃなくて、何となく決めたことは「互いがアプローチしている間は、相手の邪魔をしない」つてこと。」



はあ……よ、よご、汚れてるからあつ！ んん  
ひいっ……ら、らめですうっ♡

もう……すぐ……呂律が回らなくなっちゃうう  
だ、だ、ダメですわっ……んひいっ♡ んひいっ♡  
んきひいっ♡

「こういうテープってのは、優しく剥がさないと痛い  
からね……俺の唇で剥がしてあげるからね」

「あっ♡ んああっ♡ ら、らめっ……いい、いいです  
からあ、い、いいですからあつ、い、痛くしてもい  
いですからあ、そ、そのよう……真似はあつ」  
「俺の可愛い妹に、こんな酷いことをしちゃう兄貴な  
んだから……これぐらいの奉仕はさせてくれよ」

「そ、そんなことお……な、無いのにいっ……お、お  
に、お兄様あつ……」  
だ、ダメ……そ、そんなことお、し、しちゃあ……  
だ、ダメえっ♡

「ふふふ……濃い臭いと味……丸二十四時間浸かって  
いたわけじゃ無いけど、何か酷いことしちゃったか  
な」  
「そ、それは……」  
「痒かったり、気持ち悪かったりしたでしょ。ごめん  
ね……綺麗にしてあげるから」

「そうして、私の膣前庭部をお兄様はむしゃぶるよ  
うに、音を立てて舐め回します。私は気持ちいい感  
触に震え、興奮し、嬲られるのを、歓喜の声を上げ  
るのです」  
やがて、体液と舌先で嬲られたテープが徐々に捲  
れ上がってくる。

「美奈斗がパイパンでよかったよ」

「お、お兄様あつ！」  
「だって、痛いぜ？ これ剥ぐのに、多分毛を剃り落  
とすがセオリーになるくらい……こやあって、可愛  
がりながら後始末できるのは、僕偉だと思ってもい  
いんじゃない？」

「だ、だとしてもあつ！ だとしても、女の子に恥を  
かかせるようなこと、い、言わないで下さい！」  
「はいはい、お姫様……ん、ちよっと固いな、こっち  
のテープは……どれ」

「お兄様の舌が、ぐつと力を込めてテープに挑む。で  
も、ちよっと皮膚を引っ張る感覚があつて、剥がれ  
そうにない。」

「さすが、テープピングに使う奴だけあるなあ。一気に  
剥ぐと痛いし、幾らパイパンでも」  
「そ、そんなこと、く、繰り返して、言わないで下さ  
いっ！」

「さて……油とか、石鹸水とか、ヌルヌルするので剥  
ぐがよしだけれど……おっ！ あるじゃん！」

「私が何かを聞く前に、お兄様は、私の敏感な場所  
へと舌を進ませていっっちゃうのです」  
「そして、ジュルジュルと音を立てて、愛液を口に  
含んで……それから、テープの所で舌を押し付けて  
いくのです」

「ちよ、ちよつと、お、お兄様あ、そ、そんなので、  
は、剥がれるわけ」

「いやあ、馬鹿にしたもんじゃ無いぞ。ズルズル剥が  
れてきてる……結構すごいな。そりゃ、オマンコに  
貼ったのが、ベロベロになっちゃうわけだ」

「そうして、お兄様は私の愛液を吸りながら、テー  
プを剥がすために、私の下半身を弄んでいるのです。  
でも、そ、そんな風に責められると、わ、私い、か、  
感じちゃうじゃないですか……」

「愛液がトロトロになつてきちゃったね……興奮して  
いるんだ」  
「だ、だつてえ……お、おま、オマンコお、い、いじ  
められちゃってるからあ♡」

「オマンコ気持ちいい？」  
「……は、はい♡」  
「セックスする？」

「……な、中出し、しないで……ください……」  
「っ、むう……じゃ、いつも通りにしちゃうよ？ お  
尻でいいの？」

「そ、そつちでいいですう♡」  
だ、だつてえ、な、中出しされちゃったらあ、あ、  
赤ちゃん……できちゃうう♡

「いつも通りのケツ穴エッチでいいね？ んじゃ、ま  
ずは……お尻の中のを、放り出してもらおうかな？」

「え……あ、あのお……も、もしかして、い、今……  
入っているの……」  
「オモチャ入れたままだが嬉しいの？」  
「あ……そ、そんなことお……な、無いですう……  
うう」

「私は教壇の上で、お尻を突き出すようにしてしゃ  
がみ込まれるのです。もちろん、お尻の先にはお  
兄様の顔があつて」

「こ、こんな格好でえ……う、ウンチい、するみたい  
な真似はあつ……」  
「何言ってるんだか。美奈斗の排泄関係も俺が完全  
に掌握しているんだから……今更恥ずかしがるなよ」

「うう……あ、改めて言われると、すっごい恥ずか  
しいです」

「下半身の関係は……伴侶となるお兄様に支配され  
ちゃっているんです。も、もちろん……お、大きい  
方も」

「お兄様の変態趣味……というより、私が恥ずか  
しくなることだったら、何でもって感じですよ」

「で、でもお、あ、朝のアレはあ、で、出る所お、見  
せているわけじゃないですよ！」  
「代わりに、俺がチンポしゃぶらせてるんじゃない  
か。すっごい嬉しそうだったぞ、美奈斗は……ウン  
チしながら、可愛い声漏らして……その上、兄貴の  
チンポをしゃぶって……なんて、いやらしい妹なん  
だろ」

「お兄様の言葉の一つ一つが私の羞恥心に突き刺  
さつてきます。そして、そう告げているお兄様自身  
の欲情も高まっているのは……声の調子と、お尻へ  
のアプローチで分かっています♡」

「んん……お、おに、お兄様あつ、ま、またあ、な、舐  
めようとしてるんですね……だ、ダメですよ……  
せ、せめて、拭いてからあつ」

「ダーメッ！ 全部……綺麗も汚いも、全部俺の物だ  
から……この美奈斗のいやらしい器官も」

「そうして、お兄様は尾てい骨のラインから、臀部  
へと舌を這わせるんです。さつき、舐め回されてい  
たオマンコよりは……綺麗かも知れませんが……汗



で蒸れちゃっているからあつ。

「あ……あああ……ああ……お、お、お兄様あつ……んふうっ♥」

「そんなに震えなくてもいいじゃないか。可愛い美奈斗のお尻……ホント可愛いよ……こんなに美味しそうなの——」

私は背筋を伸ばすほど、びつくりさせられます。だつて、お兄様が……お尻の肉に何度も、何度も、噛み付いて。  
ん……ゾクゾクしちゃうつた♥

「お、お兄様あつ、だ、ダメですうっ♥ そ、そんなにい、か、噛んじやあ……んふうっ♥」

「美奈斗が放り出さないからだよ……このいやらしい肛門から……こんなに赤くなつて、ぷっくり膨らませて、いやらしいなあ」

「そ、それは……お、お兄様のお、え、え、エッチの、せ、せいではすよおっ」

「そうかな？ 美奈斗のアナルオナニーが原因だろ？ あんなに捲り上げるほど、決つたら……肛門がこんないやらしくなつちゃうのも当然だな」

「そ、そんなのお……ち、違いますうっ……だ、だつてえ……こ、こんなの……違いますうっ♥」

「何だよ……違うのか？ でもさあ、こんないやらしいの、美奈斗の一人遊びじゃなければ……俺のせい？」

「……そ、そ、そうとばかりは……い、言えないですけれどお……お、お兄様のお、せいも……あると思えますうっ♥」

「そう……だなあ。俺もちよつと美奈斗いじめすぎたかもなあ……うん。でも、今は今で楽しまないとなあ……んちゅうっ♥」

「ひあああああああつ♥ ら、らめええっ♥ そ、そんなあ……そんなあ……吸つちゃあつ……だ、だ、ダメですうっ♥」

「だつて出してくれないとさあ、エッチできないでしょお……ふふふ」

ああ……こ、こんな恥ずかしいことお、し、したこと無いのにいっ……んふうっ♥ くうんんっ♥

「んん……んくうんんっ♥ んんんんおっ……おおっ……で、で、出ちゃううう……んふうっ♥ んんんんんんんっ♥」

——ずるうっ……ずるうっ……ずらずううっ♥

「興奮してる？ 気持ちいい？ 気持ちいいよね？ その顔……トイレで何時も見せてる顔だよ……分かつてる？」

「そ……そんなことお、い、言わないでえっ……は、恥ずかしいすぎますうっ♥ くうんんんんっ……んんんんんんんっ♥」

もう……あと……ちよつと……ば、バイブが残っているのは……雁首の辺りだとお……お、思うう……けどおっ……んふうっ♥

「大分、出て来ているねえ。でも……美奈斗、分かる？ ここ一番気持ちいいんだよ」

「え……あつ！ だ、だ、だめえええっ！」

声を上げたけれども……お兄様は容赦なくバイブのスイッチを入れました。

瞬間、バイブの頭がグルグルと回つて、私のアヌスを拡張していくように、動き始めるのです。

私は悲鳴を上げ、さつさと放り出そうとするのですが、一番太い部分が引つかかつてしまい、上手く排出できません。

更に、わき上がる振動と動きに、私の快楽中枢は刺激される一方なのです。そのために、肛門の筋肉に力が入らなくなつてしまふのです。

異物感と排泄を促そうとする内臓が、体液を滲ませてしまつて居るのです。お兄様と……え、エッチする前から……こ、こうなつちゃうつて居るのは、分かるのですが……あらためて言われるととてつもな

く恥ずかしいです。

「そりゃ、恥ずかしいだろうね。何しろオマンコ以上に濡れるケツ穴なんだからさあ……美奈斗のケツ穴はあつ」

「い、いやあつ！ そ、そんな、い、言い方あ……んんんんんおおおおおっ♥」

「そんなに無理に否定すると、また根本まで挿れちゃうよ？ 最初から放り出し直しの方がいいのかな？」

「うう……で、でもお、わ、私にだつて……そ、そのお……ぷ、プライドお……女の子としてのお……プライドがあ、あ、ありますうっ！」

「プライドねえ……そんなアへ面を俺に見せておいて、プライドもどうかと思うよ。美奈斗は、もつと自分の快楽に従順になつた方がいいよ」

そう言つてお兄様はバイブを一気に引き抜きました。私は、その行為の予想もできず、激しく身体をシエイクさせ、声にならない悲鳴を上げながら……アナルで最初の絶頂を迎えたのです。

「ふふふ……いい格好だよ、美奈斗お」

「あつ♥ んあああつ♥ ああつ♥ ら、らめええ……ら、らめですうっ……んあああつ♥ んあああつ♥ お、お尻い……お、お尻い……」

「うんうん……いい感じに広がつて来てるね。でも、俺のチンポを挿れるには、少し狭いかもな……もう少し拡張してからだね」

下半身に力が入らない……足はだらしなくがに股に。そして……何もかも晒した状態。  
お兄様の目の前に取部を、内臓の奥の奥を見せている……な、何回も何回も経験している苦なのに、やっぱり女の子として、耐えられないです。  
「そうそう、耐えられないよね……だから、美奈斗は可愛いなあ、つて思うんだ。素直に耐えられないつて顔してくれるから。でも、耐えられないつていう苦悶と、気持ちいいつていう歓喜は本当に紙一重だからね……」

「もう少し、喜んで俺のチンポを受け入れて貰えるようにするのさ」

「そう言うって、お兄様は私のアヌスに指を挿れます。指は……まず、二本。それから……剥き出しになっているクリトリスに尖った舌先い」

「ら、らめえ……ら、らめえでしゅうっ♡ んあうっ♡ んあうっ♡ そ、そんなことおっ♡」

「可愛い美奈斗……そんなに喜ばないでよ。まだ動かしてもいけないし、弾いてもいけないんだよ。これから……」

「そうして、指が動きます。舌が弾きます。次の瞬間、新しい快楽の波が私の神経を通り抜け、脳を一気に焼き上げてしまいます。」

「下半身は別の存在のように、勝手に愛液を吹き出し、お兄様の顔を汚してしまおうのです。」

「ふふふ……こんな可愛いイキ方もしちゃうんだあ、美奈斗は。本当素敵な女の子だよ……ここをもっともっと愛してあげる」

「私はまともにならない悲鳴と呂律の回らない制止の言葉を繰り返すのですが、お兄様には通じません。もちろん……私の声を人の言葉だと思えるのは、かなり特別な人間ではないかと思うのです。」

「私だって、本当はまともな言葉を喋りたいのに……気持ちいいのと、酸欠になりそうなほど肺と気管が灼けるほど、ヒイヒイしているのが……原因です。」

「ちよつとうるさいよ、美奈斗お。そんなに大喜びしなくても」

「私は、首をブンブン振り回して、否定します。ここまで快楽……お仕置き……感じたことがありません。クリスマスバザーの時の意地悪だつて、あつさり気絶してしまつたので感じられなかつただけなのですよ。」

「お兄様の責めで、私は気絶することなく、息の根が止まる寸前まで責め立てられ、快楽を叩き付けられている状況は……ちよつと信じられないです。私の耐久力、というのか、持久力というのか、それが

「ここまで私を引き上げてしまっている事実。」

「さあ……指が二本だよ。これで肛門の皺を伸ばしきつて、それからチンポ挿れてあげるね」

「んあああああつ♡ こ、こ、こわ、壊れるうっ♡ 壊れるうっ♡ こ、こ、壊れちゃいますうっ♡ おおおおおつ♡」

「ごりいっ♡ つていう感触。」

「私のお尻の括約筋が切れそうな雰囲気でした。き、切れちゃつたら……元に戻らなくて……それこそ、本当にオムツ暮らしです。」

「でも、お兄様の容赦のない責めに、私は我慢を強いられるのです。」

「本当に我慢してるの？ 我慢、してないでしょ？ その顔見れば分かるっての」

「そ、そ、そ、そんなことお……そ、そんなことおおおつ♡」

「お兄様が鏡を使わなかつたことは、私にとつて僥倖でした。もし、鏡なんか使われていたら、私は自分の心が、快楽に負けてしまつたと理解するしか無かつたでしょうから。」

「鼻は広がりが、口はにこやかに緩み、頬も垂れ、涙を流して歓喜の表情を作っているのですから。」

「んじゃ、それが分かるように……これが最後のお仕置きだよ。これが終わつたら、美奈斗が気絶するまでセックスしてあげる」

「き……きぜ、気絶するまでえ……ら、らめええ……んあああつ♡ んああああつ♡」

「自分のことを思い出すと……気絶するまでつていう条件だと……あの……五回はしてもらうことになつて、いつもはお兄様の方が根を上げちゃうんです。」

「空手形の約束ですが、私には拒絶することはできません。だつて……私は、お兄様の“もの”なんだから……んんん♡」

「さあ、イッてご覧……俺の顔に思いっきりぶちまけちゃつて……いいよ」

「あああつ……お、お、おま、オマンコおおつ♡ お、おひ、おひい、お尻いいいっ♡ ら、らあつ、らめえつ♡ ぐ、グチャグチャああ……ぐ、グチャグチャ、ダメえええええええつ♡」

「す、すごおつ……すごいいよおつ♡ んんんんあああつ♡ んあああつ♡」

「お、お、お尻……お、お尻……ほ、本当にいい、こ、こわ、壊れちゃつたかもおつ……そ、それぐらいいいっ……き、気持ち……いいよおつ♡」

「そ、それだけじゃないよおつ♡ お、おま、オマンコ……オマンコにもおつ……オマンコにもおつ……ゆ、指い、は、入つてるよおつ♡」

「そ、それでえ……それでえ……き、きも、気持ちいいトコおつ……腔の中のお、い、いいところお……ゴリゴリつてえ、う、裏返されちゃつてえ……るのおつ♡」

「あはは……スゴイスゴイ！ 美奈斗お、こんなに汁出しちゃつてえ、本当に壊れてきたかな？ オマンコもケツ穴も、ドロドロでピュッピュッつて、汁出しまくりだよ」

「んんんんおおおおおつ♡ んああおおおおおつ♡ ら、らめえつ……ああ……あああああつ……」

「気が付いてないかも知れないけれど、ケツ穴には四本目が入っているんだぜ。ほら！」

「更にゴリいっ！ つて音が私のお尻から響いてきます。お兄様が丸めていた指を平らに広げたのです。私のお……お、お尻い、お、おも、オモチャにい、し、しないでえつ♡」

「してないよ……愛してるんだよ。ここまで可愛がらないと、美奈斗つて、満足しないんだからさ」

「そ、そんなら、らめえつ♡ らめええつ♡ んんんおおおおおつ♡ らめええつ♡」

「ずじゅうっ♡ ずじゅうっ♡ ずじゅうっ♡ ずじゅうっ♡ ずじゅうっ♡ ずじゅうっ♡ ずじゅうっ♡ ずじゅうっ♡」

「お尻の穴も……オマンコの穴も……お兄様にこじ開けられて……拳げ句、敏感になりすぎのクリトリスを甘噛みされながら、下半身全部を騷りものにされている——私。」





「分かっていきますわ……お兄様が気持ちよくないのに、無理しないのお、よく知っておりますものおっ」

そう……インターバル無しで直腸の奥から子宮を責められたのは、これが初めてだったかも知れないです。いつもならば根を上げて許しを請うか、絶頂失禁して強制的にインターバルを迎えるからなのです……

「さつきお漏らしさせちゃったし、美奈斗もこなれてたからかな？」  
「んふうっ……わ、分かりませんわ♥ うふふ……ん、お兄様あつ♥ 少し休ませません？ ご奉仕いたしますわ……♥」

お兄様は、頷き……私の足を広げて、ゆっくりとチンポを引き抜きます。  
ぱっくりと口を開けてしまう私のアヌス。取ずかしいですけれど、お兄様が覗き込みます。  
それは、当たり前前の行為。  
私にたっぷりと中出しした後は、どんな時でもこうされちゃう♥

「結構出したのに……なかなか出てこないなあ」  
「ん……だ、出したら……よ、よろしいですか？」  
「いや……そのまま開いていて。あ……垂れてきた。ふふふ……いやらしいよね、この光景はさあ」

開ききったアヌス……そこから、遮る物が無いが故に滴り落ちる愛する人のザーメン。それを惜しげもなく晒している……私。  
神前だというのに、はしたない男女の行為……獣以下の行為に、神の使徒であるお兄様と、神の尼僧である私は……墮落しきる。

「いいよ……閉じてご覧。痛いところとか、無いかな？」  
「んんん……ん……だ、大丈夫ですわ♥ で、でもお……ゆ、指を四本も入れられた時は、本当に裂けてしまいかと思いましたが、そ、そういうの……や、止めてください」  
「うーん……俺も調子に乗るとすっごく痛くていやらしいこと平気になっちゃうんだよね。頑張って自制

するから……許してよ」

そう言つて、済まなそうな苦笑い。  
そうされると、怒るに怒れません。  
私、ちよつとふてくされて見せるのですが、すぐにお兄様の腕が伸びてきて、愛撫されちゃうと許したくなっちゃううっ♥  
「さあ、奉仕してよ……ね」  
「あ……♥ は、はいっ♥」

奉仕——それはフェラチオ♥  
私のアヌスの中で汚れているお兄様を綺麗にする……時々、汚らしいことをしているって思うこともあるけれど……元は私のだし、お兄様のをしゃぶれると思うと全然平気なの♥

「んふうっ……んちゅうっ♥ んちゅうっ♥ チンポおっ……少しい、柔らかくなってるう♥」  
「当たり前だ。射精したばかり何だから……あ、あんまり激しくするなよ」  
「んあううっ♥ お、美味しいよおっ♥ 甘いのお……苦いのお……お兄様のお……いっばい……感じるううっ♥」  
「恥ずかしいこと言うなよ……しょうがないなあ。ほら、また元の固さに戻るぞ。噛むの、好きだろ？」  
「う、うんっ！ うんっ♥ んふうっ……んちゅうっ♥ んふううっ♥ くうんっ♥ か、硬いっ♥ か、噛み応え……いいっ♥ 美味しいっ♥ んちゅううっ♥」  
「しょ、しょうがない奴だなあ……先端はダメだぞ、本気で痛いからな」

お兄様に言われるまでも無く、私が歯を立てて味わうのは……チンポのガチガチの場所お♥ それも、本気じゃなくて……優しく。  
でも、ちよつと固めのお肉を貪るように、顎に力を込めることもある。そういう時、お兄様はちよつと顔をしかめるけれど——

「いいよ……もつと、噛んで」  
声を上擦らせて、私に要求する。  
私は、言われるままに……ゴリゴリ……ゴリゴリ……と噛みしだしていく。

すると、再び射精の機運を高めたチンポからは、先走り汁が「つびゅっ！ つびゅっ！」って噴き出して……私を濡しませる。

「ううう……よし、美奈斗お……またセックスしてやるよ」  
「んあうっ♥ う、うれ、嬉しいですよ……し、してえっ♥ してえ……く、下さいっ♥」  
「ああ……でも、その前に、入って来いよ」

お兄様は「誰か」を呼びつけた。  
私と、お兄様の愛の営み。  
そんな所に誰が来るといふのだろう。  
「んんやあううっ♥ み、美奈斗ちゃん……ご、ごめんなさいい♥」

私の姉さん——美咲姉さん。  
愛用の巫女服を着て……ううん、あまりにも着乱しているから、着ているなんて言えないかも。  
おっぱいを剥き出しにして、片手でコネコネしてしながら……内股でよろよろと私の目の前に。  
でも……見慣れないもの……

「ね、姉さん……ど、どうして」  
「ああ、俺が呼んだんだよ。美咲にも困ったもんでさあ」  
お兄様は喜々として話している。  
私には全然飲み込めない話。  
姉さんが、持てあました性欲の捌け口をお兄様に求めた。それは分かる話だ。  
それが、便所奴隷とかそういうのは、私の大切な姉さんの口から聞きたくは無い話だが、やっぱり飲み込める話だ。

「で、でもお……そ、それは……」  
緩やかな袴の中でさえ、それは異質な存在感を見せつけている。それは間違いない……ペニス……男根、オチンチン……チンポだ。  
「まあ、ちよつと変わった趣向もあってね。でもね、意外に美咲にはしっくりしたんだよね……なあ、美咲い？」

「んんんやあうう……にいいにいい、そ、そんなの、美奈斗ちゃんに話しちゃ、や、やだよおっ」  
「あれ？ 美咲、俺の奴隷だろ……大人しく、ご主人様の言うことを聞けよ」

お兄様は、姉さんが制止するのも無視して、強引に袴をたくし上げたのです。  
可愛いシマシマパンティをピンッと引き延ばして、起立しているのは間違いない……チンポです。それも……先汁ジュルジュルでえ……甘ったるい女の子の臭い。それが……チンポから漂ってくるのです。

「んんんあつ♡だ、だめえつ……もお、もお、ダメだよおっ♡♡み、美奈斗ちゃん……ご、ごめんねっ！ごめんねっ！んんんにやあああううっ！」

そうして、姉さんは……私の口の中に、パンティごと口にねじ込んできたのです。  
こうして……私はお兄様と姉さんの秘められた情事の中に叩き込まれました。  
それから、私も変容していったのです。



私は……怒っていません。  
姉さんのことはしようがないと思いましたが、お兄様が、好きなのは分かっていました。  
でも、私も引くつもりは無かったから……こんなことになったのは残念でした。  
もちろん、姉さんと一緒にお兄様を愛するのは、私の中で何の問題もありません。昔で言うなら、正室は私で、側室は姉さん。  
それだけのことです。

「で、でもお……こ、これはあ……」  
「我慢できない？」

お兄様はベンチに腰掛けて、ニヤニヤしています。  
んもお……ひ、酷いことして……これでえ笑っていただけるのですから、私のお兄様は変態です。

「あれ？ 分かってなかった？ 昔からだよ……変態なのは、さあ」  
「分かっていませんでした。それも、ここまで……反

神的な態度も、です。まったく……」  
「両性具有、アンドロギュヌスは、太古に存在した原罪を持たぬ人類だぜ？」

「そ、それを……人の力で作り上げて……それも、神の子であり、自分の妹に……設えるのは、人の、いいえ、男の倫理としてどうなんですかあつ」  
「うん、普通。って言うか、意外に美奈斗は冷静で好きかな。美咲は、すぐ甘えた声を出してさあ、手扱きを欲しがって……困ったんだ」

この状況を姉さんと比較されて、まともで良かったと言われるのは……もしかしてなくても侮辱です。

「あれ？ そうか？ チンポ生えて冷静な美奈斗は、エッチのしがいがあつていいなあ、つて言っただんだけ？」  
「そ、そんなのお……し、知りませんっ！」

私はそっぽを向きました。  
そうでないと……その……は、恥ずかしいの……見えちゃうからあ♡

「逃げるなつて……それにさつきは見ただけで弄らなかつただろ？ 優しいお兄ちゃんやで良かったら？」  
「うう……お、お兄様のお、い、意地悪う♡」

「だって、せつかく精通する日なんだから、できるだけいやらしくしたいじゃないか」  
「そ、そんなのお……お、お兄様が嬉しいだけじゃありませんかあつ！」

「俺が嬉しいのは、美奈斗が嬉しい時だけ。それに、美咲が可愛そうだろ。ふたなりで、毎日毎日男子便所でセズリしているお姉ちゃんを可愛そうだとは思わないのか？」

「そ、それと、これはあつ！」  
「まあまあ……んじや、ちよつと動かそうな」  
「えっ！ ま、待つてえっ！ んんんあつ！ んんんああああああああああ！」

お尻の、オマンコのパイプが震動します。一番小さいレベルでのバイブレーションです。  
でも……私の下半身を支配するのは。これまでにない激しい快楽です。

それが……それが……この、起立した……いい、いや、いやらしい……ち、チンポに♡チンポに♡

「んんんきひいいいいいいいい♡♡ら、らめええええ♡♡らめええええ♡♡ち、ちい、チンポおっ♡ ち、チンポおおおおおおっ♡」

いつもと同じ場所。  
いつもと同じ格好。  
いつもと同じプレイだというのに。  
私の身体は、まるで別人のように反応しています。こんな反応お……お、女の子じゃ、味わえないものです。

「んんんぎひいいいい♡♡い、痛いっp♡ ち、チンポおおっ……痛いっp♡」

「ん？ ああ、そうか……ポジションが悪いのか。んじや……自分で直してご覧」

お兄様に手を取られて……もっこり隆起している場所に手を置かれます。  
置いた瞬間、さつき感じたものと同じ衝撃が私の下半身を包んでいました。

「ん……んんんあうう……んんん♡♡くうんんん♡♡こ、これえ……でえ……いい、いいですかあつ？」

「は、はいいい♡♡き、気持ち……いいですう♡♡こ、これえ……ば、バカになっちゃうかも知れないっ♡♡」

「バカになっちゃうか……美咲を見れば、それも分かる話だなあ」

姉さん……確かに、ちよつと抜けている所もありますけれど、お兄様に「バカになった」と言われるほどじゃないから……この快楽は女の子にとつて禁断のものなのだろう。

「お、おに、お兄様あつ……こ、これえ……き、気持ち……いいですう♡♡」

「もうすぐもつと気持ちよくなるよ……ほら、パイプの強度を上げていくからね」

んんんあうう♡♡き、気持ち……いいですう♡♡お、お尻もお……お、オマンコもお……一緒にブーブーと震動が広がっていくのです。  
いつも犯されている場所がオモチャで刺激される

度、生やされちゃったチンポにピンピン響いて来  
ちやうんですう♡

「んあうう♡ んあうう♡ ち、チンポおっ  
……んんふう♡ くうんん♡ ち、チンポ  
にい……ぐううてえ、な、何か……で、出てき  
ちやうう♡」

「先走り汁だよ……でも、女の子でもカウパーモドキ  
が出てきちやうんだから……不思議だよなあ」

「んん♡……お、お兄様は……いい、いつもおっ、こ  
んなのお、か、感じてるのお？」

「ああ……多分ね。中から、つびゅつつびゅつ、つて  
出てくるの、感じるだろ？」

「は、はい♡ ち、チンポお、ビクッつてするたび  
に、き、気持ち……いいのお……出てきてえ……  
さ、先っぽがあ、よ、汚れてるのお、ちよ、ちよっ  
とお、気持ち悪いです♡」

「だから、オムツ履きななんだよ。ふふふ……俺、ちよっ  
と興奮してきたよ」

そう言つて、お兄様は私の身体を抱きしめます。  
お兄様の上に乗せられて、パイプの震動は激しさ  
を増していく一方です。

お兄様の体温を感じると……私の中で、いつもの  
興奮が盛り上がって来ちゃいます♡

「あんまりチンポばっかり激しくしちゃうと……美奈  
斗が女の子だつていうこと、忘れちゃうからな。美  
咲でよく分かつたんだよ」

「ね、姉さんでえ？」

「うん。ちよつとね……あんまりチンポばっかりいじ  
めたらさあ、今まで以上に壊れちゃうつたみたいで  
……」

「お、おに、お兄様……そ、そんなのさ」

「大丈夫だつて。美奈斗がチンポバカにならない限  
り、俺は美奈斗を女の子として可愛がるつもりだか  
らさあ」

そういつて、服の上からおっぱいを愛撫していき  
ます。興奮して、コリコリになった乳首をこね回さ  
れると……すごい気持ちいい♡

私が女の子であることも思い出させてくれるので  
す。おっぱいが気持ちいいのは……女の子だけの特  
権だと思ふのです。

「それでもないぜ……男でも乳首感じるんだから。で  
も、こっやうつて」

「んあうう♡ こ、こねこねえ……されちゃ  
うう♡ き、気持ち……いいですう♡」

「こっやうつて男は、おっぱいを揉めないからね……女  
の子の肉体はすごいと思うぜ。こんな気持ちいい  
の……すごいと思う」

お兄様の手が私のおっぱいに食い込んでいきます。  
ぐううつと……食い込んでいき、まるで乳房を犯さ  
れているような錯覚を覚えるのが、すごい気持ち  
いいです♡

「ふふふ……おっぱいばかりじゃダメでしょ。どう？  
チンポにも響く？」

「んんふう♡……き、気持ちいいのお……それが、全  
部う……ち、チンポにい、と、取られちゃつてみる  
たいですう♡」

「ふふふ……んじゃ、そろそろ美咲と同じプレイにし  
ようね……」

お兄様の手がオムツの上に、ゆつくりと置かれま  
す。分厚いオムツの苦なのに、私にはお兄様の熱い  
体温を感じることもできました。

そして、ゆつくりと掌が……勃起しているチンポ  
を包んでいくのです。

「あつ♡ あつ♡ あつ♡ ああつ♡ んんああ  
ああつ♡ だ、だめえ……だ、だめえ……」

「何か？」

「ま、まだあ……だ、ダメですう♡ んん……こ、  
こ、恐い……こ、恐いよおっ」

「恐くないつて……すぐに好きになるよ」

そうして私は震えながら、最初の衝撃に備えまし  
た。でも、備えたところで、私の身体から沸き上  
がる興奮に我慢できるわけが無いのです。

「んんああああああああつ♡ ち、ち、チン  
ポおおっ！ ち、チンポお……ち、チンポお……  
ち、チンポおおっ♡」

「こらこら……いきなり壊れないの。しょうがない  
なあ……美奈斗も」

「あ……あ……だ、だ、だつてえ……ち、チンポです  
よおっ♡ ち、チンポお……き、きも、気持ち……」

いいいつ♡ お、男のお、ず、ズルイいつ……こ、  
こんなのおつ♡ こんなのおおつ♡」

私は股間を何度も痙攣させながら、興奮させてい  
ました。痙攣と同時にチンポが……ビクッビクッ、つ  
て動くのを知りました。

私は自分の意志で動くのかな、と思ひ股間に力を  
入れてみました。すると……

「おっ……ふふふ、動くの、分かつたかい？」

「は……はい♡ う、動くのお……ち、チンポつ  
てえ、こ、こんなにい、動くのお？」

「動くよ。括約筋のせいだけれど……動いているの、  
分かるだろ？」

「は……はい♡ な、何か……面白い♡」

「面白がつちやダメだよ。これを使って、女の子の中  
を抉つたりするんだから。あと……射精するのを我  
慢するの、括約筋に力を入れたりするんだ」

そう聞くと……男の子もちよつと大変だなあ、と  
思いました。腰を動かすばかりか、こういうことま  
で気を回さなくちゃいけないつて……ホント、大変  
だと思ひます。

「こ、こんなあ……き、気持ち……いいのお、とお、  
い、い、一緒にいつ♡ 一緒にい……そ、そんなのお、  
か、考えられないですう♡」

「まあ、慣れみたいなものかな。だつて、ずっと一緒  
なんだぜ……その硬くなる奴と」

「で、でもおっ♡ でもおおっ♡ こ、これえ……き、  
気持ちいい、よ、良過ぎい、ますううう♡」

オムツの中で「つびゅつ♡ つびゅつ♡」と先走  
り汁が噴き出して……どんどんどんどんオムツが汚  
れていきます。

おしつこと違つて粘液なので、そう簡単に吸湿さ  
れず……私のチンポの先を、ニチャニチャと嫌らし  
く汚している感触に、私は震えています。

「んじゃ、そろそろ気持ちよくしてあげるね」

「んああつ♡ んあああつ♡ こ、これ、これ以上  
はあつ……こ、これ、これ以上はあつ……だ、ダメ  
ですうう♡ だ、ダメなんですう♡ き、気持ち  
……よ、良すぎますうう♡」

「ダメっ！ こっからが本番なんだから」



チンポを刺激されて、鼓動に合わせて、どつくんどつくんと痙攣するチンポの感触。  
女として、こんなのをダイレクトに感じさせられていて……まともでいられるわけがありません。

「んんあああああつ♡ ら、らめえつ♡ らめえつ♡♡ ち、チンポおつ♡ ちい、チンポおおおつ♡ くうんんんんんんんんん♡」

お兄様の手が、私のチンポを掴みました。そして、それをシュツシュツシュツ、つて動かしていきます。

「よく覚えておくんだよ……これがチンポいじりの仕方だからね。まあ、どのみち、すぐに実践できると思うけれどね」  
「そ、そんなあ……んんふうつ♡ くうんんんんん♡」

だつてえ……こ、こんなのおつ♡ お、お、覚えろつたつてえ……き、気持ち良すぎて……こ、困っちゃいますうつ♡

んあううつ♡ んあううつ♡ こ、こうやってえ……じよ、上下にシコシコしちゃうなんてえ……んんんふうつ♡

「中でどうだい？ 竿全体って感じじゃないだろ……チンポの先っぽ、亀頭の辺りが気持ちいいだろ？」  
「わ、わか、わかんない♡ わあつ、分かんないですううつ♡ んんおおおつ♡ おおおつ♡ い、いい♡♡ い、いい♡♡」

「もつと意識して……ほらっ！」

お兄様の指が、きゅつ♡ と先っぽのくびれの辺りに力を込めて締め上げます。さつきお兄様が言ったことお……分かってきたような気がします♡

「ふふふ……そうそう、その顔を見れば感じ方が分かってきたつて、俺も分かるよ」  
「うううう……い、いじ、意地悪♡」

「どれ……んじゃ、射精の感触を味わって貰おうかな？ ふふふ……俺の可愛い妹のふたなりチンポの初射精、精通をさせてあげるね」

「だ、だめえつ♡ だ、だ、だめえつ♡ だ、ダメですううつ♡♡ こ、これえ……だ、これ以上おおつ……す、すっごいのおおつ……だ、ダメですううつ♡♡」  
「あはは……美咲と同じ反応だよ。でも、美咲はもつと嬉しそうに、自分でセンズリまでしちゃったけれどね……さあ、覚悟して」

私は「ダメですううつ♡」という言葉以外を全部忘れてしまったかのように、首をブンブン振りながら、お兄様の行為を制止させようとします。

でも……そんなので止めるわけ、無いんです。  
「んんぎひひひひひ♡ ら、ら、らめええつ……つ、つ、強いいひひひ♡ つ、強いですうつ……そ、そんなにい、そんなにい、し、し、搾っちゃあつ……んんんほおおおおおつ♡ し、し、扱かないでええつ♡」

「ん……そんなにキツイ？ でも、これぐらい我慢しないと、イケないよ？」  
「い、い、いけ、イケなくてえ……い、いいですううつ……も、もつとお、や、優しくう……や、優しくううつ……」

締め上げられながら、チンポのくびれの辺りだけ、シュツシュツつてされるとお……ち、チンポおつ……チンポおつ……ピンピンつてえ、か、感じ過ぎちゃうんですうつ♡

「んじゃ、自分でしてご覧。射精するまで、今日はエツチお預けだからね」  
「うう……わ、わか、分かりましたあ♡ んんふうつ……くうんん♡」

オムツの上から、そつと包み込むようにしてみます。それだけで、ゾゾゾオつて、快感が這い上がってくるのです。

「こ、こんなのでえ……しや、射精なんてえ……ど、どんなことになってしまふのか、わ、私には……わ、わ、分からないことですよ♡」

「んんふうつ♡ んんふううつ♡ んんんくうんんんんん♡」

「どう……出そう？」  
「ま、まだあ……ですう♡ も、もつとお……し、シコシコしないと……いけないんですかあ？」

「ああ。オムツの上からだ、上手く皮も裏筋も弄れないからねえ……さつさと亀頭を刺激して射精して欲しいなあ。そうでないと、俺が楽しくないんだ」  
「そ、そんなあ……」

でも……お、お兄様を……ま、待たせるのお、わ、悪いことですよ♡  
「が……頑張つてえ……ち、チンポ扱きい……お、覚えなないとおつ♡」

「んんん……んんふうつ♡ んんふうつ♡ んんんんん……くうんんん♡ し、シコシコお……き、きつ、キツいいひひひ♡ も、もつとお……し、し、し、ないとお……い、イケないんですかあ？」

「さあ？ 俺は美奈斗じゃないから、チンポの具合なんて分からないよ」

意地悪ですよ……で、でもお、お、男の人は……こ、こんなのお、こ、越えて……絶頂お、し、して……るんでしようか……

「んんひひひ♡ き、き、キツ……いですうつ♡♡ ふうつ……て、手があ……と、とま、止まっちゃいますううつ♡」  
「しようがないなあ……我慢できる？」

「うう……うう……うううう……し、しま、しますうつ♡♡ が、我慢……し、しますうつ♡♡ だ、だからあ……んんあおつ♡ い、いか、イカせてえ……く、下さいい♡」

私はお兄様の身体にしがみつきました。もう、自分のプライドとか、気持ちとか、そんなの構ってられないです。

お兄様にしがみつきますが……これから登つてくる絶頂感に耐えなくてはいけないのですから。

「んああうつ♡ んああううつ♡ んんんんんんん♡ んんひひひ♡ んんひひひ♡ んんひひひ♡」

「どう……来てる？」  
「ううあああううう♡ んんんんぐううううううううう！ す、す……凄いのお……き、きてえ……きてますううつ♡」

お兄様の手によって蹂躪される……私の……ち、



「こ、これええ……これえ……だ、ダメですうっ  
……ま、まだあ……まだあ、ビクンビクン、し、  
し、してえ……してるううっ♡」

「うん……いっぱい、出てる。すっごい量だと思うよ  
……美咲なんか目じゃないくらいだよ。ふふふ……  
美奈斗の方がスケベなんだな」

「ど、どお、どお……い、い、いう……こ、ことです  
かあっ♡……んんん♡」  
「スケベなほど、ザーメンの出しがいいんだって……そ  
ういう風に説明があつた。ふふふ、オムツで正解だっ  
たね」

「んん……な、何が……」  
「コンドームだったら、多分破裂しちゃってるかもね  
……それはそれで見物だったろうけれど」

お兄様の意地悪な視線……追い掛ければ勃起して  
オムツを押し上げたままのチンポの先端。  
オムツ越しに、どんなことになっているのか……  
期待している視線。

「ん……もう、出終わつた？」  
「うう……あううっ♡ は、はい♡ で、でもお  
……ま、ま、まだあ……まだあ、しゃ、射精感があ  
……の、残つてえ……ますうっ♡」

「ビックンビックン、してるんだ」  
「は、はい♡ と、とま、止まらないですう♡」  
「見ておこうね……美奈斗の精通の結果だからね」

お兄様が私から離れます。でも、私は不安で、恐  
くて……こんな性感の結果あ、う、うけ、受け入れ  
られるか……じ、自信が無くて……

「大丈夫……美咲だって、大丈夫だったんだから」  
「ね、姉さんは……と、特別だったんでしょ……わ、  
私い、こ、恐い……ですうう」  
「気持ちいいことが恐いのは、いいことだよ……もつ  
ともつと気持ちよくなるんだから。怖がつて貰った  
方が……俺が嬉しいなあ」

意地悪の極み……お兄様、最低い。  
でもお……さ、最低なあ……お、お兄様が……好  
き♡……だ、だから……姉さんとの情事も許したし

……こ、こんな、最低で……最悪のこともお、ゆ、許  
せるう♡

「さあ……足を広げて。力が入ってないだろうけれ  
ど、足をこっちに持つてきて……そうそう」

今更ながら腰が抜けていることに気付きました。  
こんな絶頂感……久々です♡……ちよつとお  
う、嬉しいかもおっ♡

「さあ……外すよ……」

オムツの留め具が外され……そして、前カバーが  
開かれて。

「うううっ……んあううっ♡」  
「うわっ！ す、上げえ……こ、これ、何だよお……  
い、いやらしすぎだよ……」

お兄様の声の上擦っています。  
朦朧としながら……私は視線を合わせます。

「あ……あああ♡……な、な、なんですか……こ、  
これえ……こんなお……さ、最低ですうっ……だ、  
だめえっ……い、いや……いやあっ！」

「すっごいなあ……こんなに射精できちゃうんだ、美  
奈斗のチンポお」  
「うう……み、みな、見ないでえ……」

簡単に言っつてしまえば、コンビニで売っている  
ヨーグルトのパックをそのままひっくり返した……  
そんな感じです。

その真ん中で、少しだけ萎えたチンポが「びくんっ  
♡ びくんっ♡」って……先走り汁を、まだあ……  
吐き出しているんですうっ♡

「いやらしい娘だなあ……美奈斗お」  
「うう……うううっ……だ、だめえ♡……ダメですう  
……こ、こんなのでえ、い、いじ、いじめられたらあ  
……わ、私い、た、立ち直れないですうっ」

「大丈夫……俺の可愛い妹。俺の可愛い奥さん。それ  
が美奈斗なんだよ……さあ、もつともつといじめて  
あげる」

「そ、そんなあ……わ、私い……もおっ……もお、し、  
死にたいくらいいい、は、恥ずかしいのお……お、お

「ね、お願いですう……もおっ」  
「ダメ。死ぬなんてバカ言わせないよ……俺、久々に  
キてるんだから」

そう言っつてお兄様はもどかしくズボンを脱ぎ、パ  
ンツを脱ぎ、バキバキに勃起したチンポを私に見せ  
つけるのです。

「あ……ああっ♡……お、お兄様のお……す、すっご  
い♡……ぼ、勃起い……してるううっ♡」

「美奈斗がさ……可愛い声で嘆いてくれたし、その結  
果が……このすっごいいやらしいんだよ。俺、本気  
で興奮してるんだ」

「ね、姉さんの時はあ……こ、こう……じゃなかつた  
んですかあ？」

「美咲の時も……結構興奮したけれど、美奈斗ほど  
じゃないよ。ヤつぱり、美奈斗は俺の美奈斗だから  
……すっごいエロ可愛いよ」

「そ、そんなのお……い、ふたなりのお、い、いやら  
しい光景見て……い、言われてもお、う、嬉しくあ  
りませんっ」

「ワガママなんだから……でもお、こうすれば、ワガ  
ママもすぐ終わるね」

そうして、お兄様は、私の足を取り上げて……チ  
ンポを、挿入して――

「んんんんあああああああ♡……ち、ちが、違  
いますうううううっ♡……そ、それえ……そりえ  
ええええええっ♡……ち、ちが、ちがひますうううう  
ううううううっ♡……んんにゃあああああ♡……  
「こう……したかつたんだよ。あんまり……エロ過ぎ  
な格好しないの……」

お兄様は……私を犯すポジションなのに……チ  
ンポお、お、押しつけてるのは……わ、私のお、ち、チ  
ンポお……な、何ですうっ♡

「んんああああああおおおおっ♡……だ、だ、だめえっ  
……だ、ダメですううううっ！」

「うん……ダメだつて分かってるよ。だつてえ、こ  
んなの……ホモ同士のセックスみたいだもの」

「だ、だつたらああっ！ ふ、ふ、ふっ、普通う……  
ふ、普通に、普通に……し、してえ……してえ、  
して下さいいっ♡」



う、裏のお、敏感な所お……す、すうっ、すっごい  
んですうっ♡  
「ご、ごりいっ……つてえ♡、ごりい、つ  
てええっ♡」

「いい顔だよ……そんな泣きそうな顔されちゃうと、  
興奮するじゃないか。ほら……もっともっと気持ち  
よくしてあげるね」

「んんひいひい♡ んんひいひいひいひい♡  
い、いひい♡ いひい♡ んんんんんんあああ  
あああああ♡♡♡ で、で、出るううう♡♡♡  
で、  
出ちゃ、出ちゃううううううう♡♡♡ ち、チン  
ポお♡♡♡ チンポお、い、イグううううううう  
うううううう♡♡♡

——どぶぶううううううううううううううう  
うううううう♡♡♡ ぶぶううううううううう  
うううううう♡♡♡ ぶぶゆるうううううう  
うううううう♡♡♡ ぶぶうううううううう  
うううううう♡♡♡

……んああ♡♡♡ んああ♡♡♡ んああ♡♡♡  
ああ♡♡♡ す、すっごお……いひい♡ んふうっ  
……んふううう♡♡♡ く、癖……にい……ななっ  
ちやうう♡♡♡  
だ、だめえ……こ、こんなのお……わ、私い、お、  
女の子なのにい……こ、こんなのでえ……き、気持  
ちよくなっっちゃあ……だ、ダメなのお♡♡♡

「一回射精しているのに、こんなに出して……いやら  
しい娘だなあ」  
「んあううっ……んふうう♡♡♡ で、出ちゃった……で  
すうっ♡♡♡ い、いっばい……出過ぎい……なの  
か  
なあ……」  
「出し過ぎだね……ほら、前髪にまで飛び散って……  
普通にしてるのに、セルフ顔射しちゃうなんて  
……可愛いなあ」

あ……あううっ♡♡♡ そ、そんなにい、み、見つめ  
ちゃ……だ、ダメですうっ♡♡♡ は、恥ずかし過ぎで  
すうっ……んくうん♡♡♡  
「可愛い美奈斗を、もっといじめてあげるね……」  
「え……あ……やあ♡♡♡」  
「舐め取ってご覧……自分で出したのだからね」

「んふうっ……んあううっ♡♡♡ んちゅう……  
ちゅううっ……んふうっ♡♡♡」

お兄様の差し出される指を舐めます。  
甘ったるく、いがらっぽい白濁液を……私は舌を  
突き出して舐め取っていくのです。それを……愛し  
て止まない人に見られるのが……すっごい興奮させ  
られているんです♡

「ん？ 何だよ……もう勃起し直したのか？」  
「え……あ……うう……そ、それはあ……」  
「しょうがないなあ。まあ、俺、まだイッてないし、  
美奈斗がまだまだイケるなら……いいかな？」  
「あ……あうう……んん……うう……」

「舐ずかしい♡ ち、チンポお……イカされちゃう  
たばかりなのに、またあ……興奮しちゃうなん  
てえ♡♡♡ で、でもお……もっともっとお、で、でき  
そうですうっ♡♡♡

「んじゃ……獣みたいにセックスするか」  
「は……はい♡♡♡」  
お兄様は私を床に下ろして、お尻を上げさせます。  
ああ……ほ、本当に獣みたいにい、バックから……  
さ、されちゃうんだあ♡♡♡

「ふふふ……オマンコの方も、又レ又レだね。本当は  
こつちをメインに犯したいんだけれど……なあ」  
「だ、ダメですう……ほ、本当に、に、妊娠……し  
ちゃうからあ……お、おね、お願いですう、こ、こつ  
ちでえ……」  
「分かってるって。でも、今度だぞ……今度は絶対に  
美奈斗を孕ませるんだからな……いいね」  
「は……はい♡♡♡」

ああ……だ、ダメ……もお、ダメえ。  
姉さんまで使って、私のこと……妊娠させようと  
している。ううう……ま、まだ、学校、一年もある  
のに……うううっ。  
「そんな悲しそうな顔しないの。いっばいっばいっばい  
持ちよくしてあげるよ……」  
そうやって私の顔の前に、ベシヤツと音を立てて、

何か投げ出されます。  
それは……さっき、私が嗅いでいた臭い。 投げ出  
されたのは……私が使っていたオムツです。

「あ……え……な、何い……」  
「美奈斗をいじめるアイテム。自分のザーメン……美  
味しかった？」  
「え……そ、そ、それ……はあ……その……」  
「ふふふ……可愛い反応しちゃって。ホラ……コリコ  
リだよ」

「んああああああ♡♡♡ だ、だめえええっ……んん  
あううう♡♡♡ ち、ちん、チンポお……だ、ダメ  
ですううっ♡♡♡ んんん……んふうう♡♡♡ くうん  
ん♡♡♡」  
「ザーメン舐め取りで、興奮している……可愛いふた  
なり妹つてのは、本当にエロエロだね」  
「い、いわ……言わないでえ……く、下さい♡♡♡  
んんふう……くうんん♡♡♡ だ、だめえ♡♡♡  
んああうう……ち、ち、チンポお……ち、チン  
ポおおっ……んああああうう♡♡♡」  
「さあ……ハメてあげるね。オムツのザーメンを舐め  
ながら……感じるんだよ」  
「は……はい♡♡♡ んんふう……んあうう♡♡♡  
く、臭い……い、いっばい……だ、出しちゃっ  
てえ……臭いですうっ♡♡♡」  
「自分で出したのだから……ね。たっぷり味わって楽  
しむんだよ」

お兄様の指が、アヌスをこじ開けます。エッチな  
興奮のせいですが……舐ずかしいですが、もお、準備  
できている程、濡れちゃっています♡♡♡

「ん……いやらしいね。さあ……挿れるよ」  
「あ……は、はい♡♡♡ んん……んんんおおお  
おおおおおおお♡♡♡ は、入ってえ……き、き  
たあ♡♡♡ は、入ってきちゃったよお♡♡♡」  
「うう……す、すっごいなあ……美奈斗お。愛撫も無  
しで、こんなに濡らしちゃって……お尻だよ、分かっ  
てる？」

「はあ、は、はい♡♡♡ そ、そう、そうなん  
ですうっ♡♡♡ ご、ごめ、ごめんなさい♡♡♡ んん  
ふうっ……んんおおお♡♡♡」  
舐ずかしい……チンポいじめられて、お、お尻の  
中までビショビショにしちゃってるの……だ、だ

メなのにいっ ♥ ンおおっ ♥ おおおおっ ♥  
だ、だめえっ ♥ き、気持ち ♥ 良過ぎるうっ ♥

「スケベな美奈斗……可愛いよ。もつともつと、気持ちよくして欲しいでしょ」

「くうん ♥ ンんふうっ ♥ あうっ ♥ も、もつと ♥ し、してえ ♥ してえ、ほ、欲しいですうっ ♥」

「んじゃ、ザーメン舐め取りなよ……自分の中で興奮を高めるんだ」

「辱め——お兄様が積極的に行うこと。姉さんだつて、私だつて、こういうことをされるより普通に愛された方が好きなのは分かっているけれども……こっちの方が遥かに興奮するのは確かかなことです」

「んちゅうっ ♥ ンちゅうっ ♥ ンんふうっ ♥ うう……え、えぐい ♥ ですうっ ♥」

「キツイ？ じゃ、きつくならないように……」

「んんひいひい ♥ ンんおおおおおっ ♥ あ、穴 ♥ ……こ、こ、壊れちゃ ♥ 壊れちゃうううっ ♥ ら、らめえ ♥ ら、らめえ ♥ ンんんひいひい ♥」

お兄様のチンポお……お、お尻の穴にい、ぜ、全部う……い、挿れられちゃったあ ♥ そ、その状態でえ……こ、腰をグラインドするの ♥ だ、だめえ ♥ ……あ、穴 ♥ ……穴があ、ほ、本当に、こ、こわ、壊れちゃうううっ ♥

「大丈夫……指が四本も入るような、スケベな穴なら……ね……ほら、エッチな汁までダラダラ出てきちゃって……気持ちいいでしょ？」

「んひいひい ♥ ンんん ♥ ンんおおおお ♥ ら、らめえ ♥ ……ら、らめえ ♥ し、しき、子宮う……お、押し潰され ♥ ちゃううっ ♥ お、お兄様 ♥ ……」

「あはは……そうだったそうだった。でも、我慢して……もつと飛ばしてあげる、ほら」

少し引き抜いてから、角度を付けて、ずどん ♥ 私の大事な場所に、凄まじい電気が駆け抜けていくのです

私は、汚濁液まみれのオムツを貪るように、噛み

しめながら、この興奮と快感に耐えていました。でも……もお、次の限界がやってくるのです

「んんへええ ♥ ……あ ♥ うああ ♥ う、う、嘘おお ♥ ……もお、もお ♥ ……き、きちや、きちやうう ♥ ……きちやうう ♥ ……」

「なんだ……俺の射精も待てないのか。しょうがない奴だなあ。でも、いいよ……何回でもイッてくらん。今日は一晩中付き合っただけ」

「ずじゅう ♥ ……ずじゅう ♥ ……ずじゅう ♥ ……ずじゅう ♥ ……」

悲鳴を上げます。髪の毛を掻きむしります。そればかりではなく……もお、はしたないのも気にせず……パンパンに腫れ上がった自分のチンポを、しこりながら、乳首を捻りました

「さあ、これでイッちゃえ」

「……」

「さあ、これでイッちゃえ」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

ジュズジュズと、私のお尻から派手な音が響きます。もお……腕には力が入りません。ザーメンまみれのオムツに、顔を押しつけて、私はただひたすら犯されている状態です

「んん ♥ ……んん ♥ ……んん ♥ ……」

「んん ♥ ……んん ♥ ……んん ♥ ……」

「んん ♥ ……んん ♥ ……んん ♥ ……」

「んん ♥ ……んん ♥ ……んん ♥ ……」

「んん ♥ ……んん ♥ ……んん ♥ ……」

「んん ♥ ……んん ♥ ……んん ♥ ……」

「んん ♥ ……んん ♥ ……んん ♥ ……」

「んん ♥ ……んん ♥ ……んん ♥ ……」

「んん ♥ ……んん ♥ ……んん ♥ ……」

「んん ♥ ……んん ♥ ……んん ♥ ……」

「んん ♥ ……んん ♥ ……んん ♥ ……」

「んん ♥ ……んん ♥ ……んん ♥ ……」

「んん ♥ ……んん ♥ ……んん ♥ ……」

「んん ♥ ……んん ♥ ……んん ♥ ……」

「んにゅう……そ、そういうことお、言われるとは思わなかったよお」

「私は、姉さんよりも出席率がいいんです。それに、委員会活動で点数も稼いでいますから」

「んにゅうあ、狡いなあ」

「な、何がですか！」

「委員会活動お、私物化しているう……にいにいと、放送室でえ、エッチしているう」

「顔が赤くなっていくの分かります。でも、そんなの、お兄様が話さなければ。」

「ごめん……つい、喋っちゃった」

「お、お兄様！」

「しっ！ 幾ら目立たない場所でも、そんな大声出したら先生が出てきちゃうよ……」

「で、でもお！ そ、それに、ね、姉さんには関係ない苦です。私とお兄様が……その、何処で性生活しよう」と

「んにゅうあ……別に美奈斗ちゃんを怒らせたいんじゃないよお……ただ、狡いなあ……」

「んもお……ど、どうしたいんですか、姉さんは！」

「姉さんは、モジモジしながらお兄様の方を見る。んもお……また、お兄様の仕業なのね。」

「ち、違うって……最初に言い出したのは、美咲だよ。今回は違うて俺じゃない」

「んにゅう……にいにいのお、意地悪う♥ 美奈斗ちゃんを可愛がりたいのはあ、にいにいだってえ……一緒にやないい」

「か、可愛がるって……な、何のことですか」

「分かっている癖に……やっぱ美奈斗ちゃんは狡いなあ……むう」

「わ、分かっている癖で……分からないから聞いているのに、んもお、姉さんのバカ。」

「簡単なことだよお……エッチい、したいのお♥」

「え、エッチ……こ、ここでえ？」

「だ、だってえ……ほらあ、私とにいにいでえ、美奈斗ちゃんとお、すっごいエッチしてからあ……私、のけ者なんだよお……狡いよお♥」

「そんなことお……い、言われてもお……」

すると……姉さんは、お兄様に目配せしました。何をすつつもりなのか、と思つたら、いきなり私の唇を奪ってきたのです。

「んんふうう……んふうつ♥ んんくうんんつ……ね、姉さん……な、何をお」

「うふふ……美奈斗ちゃんを可愛がるのお♥ にいにいと、どんなエッチしてるのかあ……知りたいからあ♥」

「そ、そんなのお……ね、姉さんっ！ だ、ダメですう……やあつ♥」

姉さんはスカートの前を捲ります。パンパンに勃起したチンポがパンティを押し上げていました。

「んにゅう♥ いやらしいでしょお……これえ、朝になるとお、すっごい勃起して痛いんだよお♥ 美奈斗ちゃんは、にいにいと、エッチしまくっているからあ……平気だよねえ」

「そ……そんなことお……」

「ありません——わ、私だつて、朝勃ちぐらいしちやいます。ただ、お兄様がいるからあ……すぐにエッチされて、鎮められちゃうだけで。」

「美奈斗ちゃんと違つてねえ……私は、いつも学校で処理して貰うんだよお♥ にいにいのお、便所奴隷だからあ……男子トイレでえ……いっぱい処理して貰うのお♥」

「そ、そんなのお……い、言わないでえ……」

想像すると……や、やだあ……こ、興奮するう♥ だ、ダメよお！ ね、姉さんが……そんな状態になつちゃうのお……感じちやあ。で、でもお……お、遅い……だ、だめえつ♥ ぼ、勃起い……し、しちゃううつ♥ んんんあああああああつ！

「んんんああうつ♥ 勃ちちゃつたあ……ダーメえ♥ 隠そうとしてもお……ダメだよお♥ お姉ちゃんの話聞いてえ……興奮しちゃつた？」

「ううう……ね、姉さんのお、い、意地悪う」

「んにゅう……ごめんねえ。もつとお、普通にエッチしたいけれど、私、私、お、変態さんだからあ……すっごいイヤらしくないとお……興奮しないんだ

「そんなことお……い、言われてもお……」

「よお♥」

「そ、そんなことお、い、言われてもお……」

「んにゅうあ♥ にいにいに、ふたなりメスチンポでのお、エッチい、見せようねえ♥ にいにいもお、見たいでしょお？」

お兄様は黙つて頷く。その辺にあつた椅子に腰掛けて……私と姉さんの情事を眺める。

「んにゅうあ……美奈斗ちゃんのお……私と同じぐらいなんだねえ♥ やっぱいい、双子だからかなあ？ 皮もお、エッチなぐらい弛んでるのかなあ？」

「そ、そんなのお……わ、分かりません。ど、どんなのがあ……せ、正常なのか……そんなのお。」

「んにゅう……にいにいのお、毎日エッチしてるのに、分からないのお？」

「だ、だつてえ……わ、私たちのお、お、お兄様のお、ち、違うからあ……こ、これでえ、せ、正常じゃないの？」

「立派なあ、包茎チンポだよお♥ いじめられちゃうんだよお……包茎チンポだよお♥ にいにいに、いじめられなかったの？ ゆるゆるの皮の中に、指とか挿れられて、亀頭の中あ、コネコネされちゃったりい……皮だけ指先で引つ張られてえ、グリグリしたりい？」

「……な、無いですう」

お兄様つたら、苦笑しているう。姉さんには、結構意地悪なことお、してるんだあ……ちよ、ちよつとお、酷いかも……

「んにゅううつ！ んじや、美奈斗ちゃんはお……チンポ躰けえ、されてないんだあ。にゅう……んじや、お姉ちゃんが躰けてえ、あげるねえ……うふふ♥」

「ね、姉さん……ちよ、ちよつとお……そ、そんなことおつ」

「パンティを押し上げているチンポの先つぽを、姉さんは押しつけてきます。そこは、敏感になつてい

る……裏筋の所お。」

「そんなことお……い、言われてもお……」

「んああううっ♥ だ、だめえっ……ね、姉さんんっ♥  
「そ、そんなのお……き、気持ち……よ、良くなっ  
ちやううっ♥」  
「んにゃあ……だからあ、いいんだよおっ♥ チン  
ポお、いっぱい、気持ちよくなつてえ……お姉ちゃ  
んに、美奈斗ちゃんの取っずかしいの、見せて欲し  
いよお♥」  
「そ、そんなあ……だ、だめえっ♥ んあああつ  
……ご、ゴリゴリしちゃあ……で、出ちやううっ♥  
し、汁う、出ちやううっ♥」

でも、私よりも先に姉さんの方がいやらしい汁を  
滴らしてました。そのヌルヌルしたのが……私の  
パンティにも染みついてきて、何だかいやらしい気  
分になってきちやううんですっ。

「んんにゅう……美奈斗ちゃんのお、皮むき慣れてな  
いからかなあ……全然先汁出てこないよお」  
「美奈斗の先走り汁って、美咲と同じぐらい、いっぱ  
い出るんだぜ……皮剥いてやらないと、分らない  
んじやないか」  
「お、お兄様あつ！ そ、そんなのお……」  
「そっか！ んじゃ、えへへ……えいっ♥」

姉さんは……私のパンティの前を引つ張りました。  
抑え込んでいるモノが無くなつてしまつたチンポが、  
身体に叩き付けられる勢いで現れます。

「んああううっ♥ んふうっ……くうんっ♥ だ、だ  
めえ……ち、チンポお……こ、こんなところでえ、だ、  
出しちゃあ……ああっ♥」  
「んにゃあ……可愛い♥ しゃぶりたくなつちや  
うよお……でもお、いにいに、怒られちやううからあ  
……ゆつくりエツチしてあげるう♥」

そう言つて姉さんも、自分のチンポを剥き出しに  
します。そのまま、私のチンポに自分のチンポを押  
しつけて……クチュクチュと責め立てるのです。

「んんああああつ♥ だ、だめえっ……そ、それえ  
……それえ、だ、だめえっ♥」  
「ねえ……気持ちいいでしょお？ にいにいに、よく  
いじめられたんだよお……美奈斗ちゃんもそうで  
しょお？ うふふ……これえ、すっごいいやらしい  
よねえ♥」

「だ……ダメですうっ……こ、こんなのお、お、女の  
子が……し、していい、え、エツチじゃあ……あ、  
ありませんよおっ！」  
「うふふ……だからいいんだよおっ♥ 私たちみたい  
にい、変態姉妹がするのにはあ、すっごくう……具  
合がいいんだからあ♥」

こ、こんなのお……く、癖になつたらあ……ど、ど  
うするつもりなのでしょう。た、ただでさえ……お、  
お兄様にい、い、い、意地悪う……されてえ……気  
持ちよくなつちやううてるのにい。  
ううう……こ、困りますう。

「いいんだよお……気持ちいいのがあ、正義なんだか  
らあ♥ んんにゃあ……ほらあ、先つちよでえ……ク  
チュクチュしちやうよおっ♥」  
「んんぎひいっ♥ だ、だめえええっ♥ んんあ  
あつ♥ んあああつ♥ だ、ダメですううっ♥ そ、  
そんなのお……き、きも、気持ち……いい……  
のおおっ♥」

私はあつさり姉さんの言葉に折れていました。  
そうです……気持ちよくて何がいけないのでしょ  
う。確かに取っらいいあります。

でも、お兄様が何もかも許してくれている状況で  
……何を取っずかしがる必要があるのでしょう？

「そうだよお……さあ、腰動かして……チンポお、剥  
きつこお、しようねえ♥」  
「んんんんんっ……んあううっ♥ ね、ね、姉さん  
……んふうっ♥ こ、こ、こんなのお……こんなのお  
……す、すご、妻すぎるうっ♥」  
「んにゅう……私は慣れちやつたから、それほどでも  
無いけどお、美奈斗ちゃんは初めてなんだよねえ♥  
んじゃ、こんなに先汁う、トロトロになつちやつ  
てもお、しょうがないよねえ♥」

私と姉さんの先走り汁は、すっごい量になつてい  
ました。私の方が多いのですが、口では平気なよう  
なことを言っている姉さんだつて、その量は尋常で  
はありません。

「んにゃああううっ……だ、だつてえ、だつてえ……  
き、気持ちいいとお、いっぱいいっぱいい、で、出  
ちやううんだもんっ♥」

「ん……んふうっ……む、剥いたらあ、な、中に溜まっ  
ているのお……」  
「うん♥ うんっ♥ いっぱいいい、出ちやううよお……  
いっぱいいいっばい、滴つちやううよおっ♥」

私のも、姉さんのものも、ちつとも剥けている状態で  
は無く、先端の弛んでいる部分を互いに弄んでいる  
……そんな感じですよ。

「んにゃああ……いにいにがあ、もどかしく思つてい  
るかも知れないからあ……一気に剥いちやううよおっ」  
「え……あ……そ、そお、あ、合わせればいいのね……  
あうう、こ、こんなあ、剥かれ方あ……は、初めて  
かもおっ♥」  
「んじゃ、気持ちよすぎで……壊れないでねえ♥」

そう言いながら、弛んでいる先端同士がクチュク  
チュと……キスを交わします。ヌジュヌジュした中  
で「こりいっ♥」つて激しい衝撃。  
私は声も出せず、姉さんから腰を引いてしまいま  
す。

「んにゃあ……チンポのお先端、擦つちやつたあ？」  
「い……痛い……こ、こんなのお……」  
「オチンチンの口い、すっごい敏感なのお。だからあ、  
あんまり擦らないようにい、しないとお……大変だ  
よお」  
「も、もつとお……早く言つて下さいい……ひ、ヒリ  
ヒりするう」  
「んにゃあ……じゃあ、ちよつと剥いてから、ゴリュ  
ゴリュつてえ、しようねえ♥」

姉さんの言葉に従つて、ちよつと先が見えるぐら  
いだけ、皮を剥いてから、クチュクチュと押しつけ  
合いつこします。

チンポに快感が走つて「びくんっ♥」つて痙攣す  
ると、どちらの先走り汁か分からないですけれど  
……溜まっていたのが、糸を引いて滴り落ちていき  
ます。

私と姉さんの吐息と喘ぎしか聞こえない廊下に、  
ぴちゃんっ♥ つて……小さいけれど、いやらしい  
卑の音が響くんです。  
その小さな音でさえ、私を興奮させてくれます。そ  
う……私たちは決して正しい行為をしているわけ  
じゃないつていうことを、知らしめているのです。

「んにゅう……もつと、ゴリユゴリユしないとお、お姉ちゃん、射精できないよおっ♥」  
 「だ、だってえ……こ、こんなのお、わ、私の方が……耐えられないですよっ」  
 「にやあ……そうだねえ。私い、にいにい、羨けられちゃつてるからあ……うふふ♥」  
 「そ、そんなのでえ……じ、自慢しないで下さいい」  
 「にやあっ！ いいじゃないい……美奈斗ちゃん、正室なんだよー。奥さんなんだよー。わ、私なんか……側室でも、愛人でもなくてえ……奴隷なんだからあ♥」

それは聞いていますし、分かっているつもりです。でも、お兄様が、私よりも何かを施したっていうこと……それが私の小の小さなしこり……なのです。  
 「にゅう……その顔は、納得してないなあ。いいよー、お姉ちゃん……美奈斗ちゃんに蔑まされるようなことお、しちゃうからあ♥」

そうして、姉さんは私から離れます。  
 私は、いきり立ったモノをどうしていいか、分からないまま見つめています。

「んにやあ……にいにい♥ まだあ、今日はしてないよねえ……」  
 「してないって……何が？」  
 「日課あ……私い、お便所なあ、日課してないよねえ♥」  
 「ああ……そうだな。こでししたいのか？ いつもお便所じゃなくて」  
 「うんっ……こでえ、したいよお。してみたいよおっ……美奈斗ちゃんに見て貰いたいのお♥」  
 「ふーん……まあ、いいか」

そう言ってお兄様は、立ち上がって姉さんの前でズボンのファスナーを下ろしました。  
 それから……チンポを取り出します。  
 まだ、勃起していないチンポは……大人しそうに見えます。あの凶暴そうな雰囲気は、やっぱり怒張した時だけなのでしょう。  
 柔らかいチンポを姉さんは、口に含みます。そして……お兄様は――

「今から、小便を飲ませてやるんだ」

と、にやつきながら私に話しかけました。  
 知ってはいました。  
 そうやって姉さんが、私とお兄様の間に……いいえ、側に近づきたいと思っていたのも。ふたなりになつて、もつともつと恥ずかしい姿を見せて、お兄様を喜ばせようとしたのも。  
 でも、それを何もかも見るのは、全然話が違うのです。

「だ、だめえ……お、お兄様も、姉さんも止めて。そういうの……良くない。か、身体にだつて……わ、悪いし」  
 「そういうので、美咲が満足すると思うか？」

姉さんの視線――「黙って見ていなさい」  
 私は、その死せとお兄様の言葉に従うしかありませんでした。

「出すぞ……」  
 「んふうっ……んぐうっ♥ んふうっ……ふうんんんんっ……ん……ごくうっ♥ ごくうっ……ごくうっ……ごくうっ♥」

喉を鳴らして姉さんは、お兄様の小水を啜っています。こ、こんなおつてえ……こ、こんなおつてえ……だ、だ、ダメ……や、やめてえ。

「んふうっ……んにやあ……もお、終わりい？」  
 「そんなに溜めてなかつたんだ。それに、今日は美奈斗との約束があつたからな」  
 「んにゅう……今日もお、美奈斗ちゃんのお」  
 「お前は俺の奴隷なんだから、黙って俺の言うことを聞いておけばいいの……分かつた？」  
 「はーいっ♥」

ニコニコとしている姉さんを見て、私は、私が分かつていなかつたことがあります。  
 姉さんはこれで、幸せなのです。  
 そう……私のように、お兄様のために何かをなさなくちゃいけないひとじゃなくて、ただそこにいれば幸せな人なのです。

「んにやあ……美奈斗ちゃん、どうしたの？ 神妙な

顔でえ……えへへ♥もしかして、びっくりしたあ？ にいにいのお、おトイレえ……してるのお？」  
 「え、ええ……驚いた。見たのは初めてだし……」  
 「んでえ……チンポお、手扱きしてるんだあ♥」  
 「え……あ……それは……」

知らない内に、私は自らを慰めていました。もつとも、姉さんが言うほど救しいわけではなく、イジリ回すような感じで……

「うふふ……よく神社に遊びに来る男の子みたいにい、チンポ弄つてるう♥」  
 「そ、そ、そんなのお……し、知りませんっ」  
 「男の子の性の目覚めつてえ、こつやつてチンポが反応しちゃつてえ、弄りだしたら始まるんだつてー。美奈斗ちゃんもお、チンポイジリが好きになつてきたー？」

「そ、そんなのお……」  
 「んにやあ……いいんだよお♥ 後でえ、もつともつとお、気持ちよくしてあげるんだからあ♥ でもお……今日はこでえ……いっぱい射精するのお♥」  
 「しゃ、しゃ、射精い……」

そうして姉さんは、私の下半身に自分の下半身を寄せてきました。さつきと同じ体勢ですが、向きがちよつと違います。

「な、何を……」  
 「壁にい、マーキングするんだよお♥」  
 「ま、マーキングう？」  
 「そうだよお♥ 牡犬のお、縄張りみたいにい……おしっこじゃなくてえ、チンポ汁でえ、しちゃうんだよおっ♥」  
 「そ、そんなのお……で、できせんっ！」  
 「できるつてえ……ねえ、にいにい♥」

お、お兄様にい、きよ、許可なんか……求めないでえ……そ、それ言われたらあ……  
 「ああ、美奈斗もやつてご覧。上手くできたら、ご褒美……してあげるね」  
 「んにやあ……私はあ、にいにい？」  
 「美咲にも、同じご褒美をしてあげる……楽しみにしているんだよ」







です。  
でも、姉さんのは……もしかすると、大きいのでしようけれど……お兄様のモノほどじゃないので、何だか安心して……犯されるみたいない気分です。

「んんにゃあ……美奈斗ちゃんのお、お、お尻い、又ルヌルう……すっごいねえ♥」  
「そ、そんなのお……か、感心しないでえ……は、恥ずかしいですうっ♥」  
「だつてえ、オマンコよりい、濡れてるんじゃないの……スケベ過ぎだよおっ♥」

「そ、そんなことお……お、お兄様にい、ちよ、ちよ、調教されたからですう……うううっ♥」  
「調教はしてないよ。単に普通にハメただけ……まあ、元々美奈斗はケツ穴でイケちゃうぐらいのスケベだからな」

顔が熱くなります。  
お尻を……姉に犯され。  
それで……感じて。  
それを……兄に指摘され。  
なのに……私は、すっごく興奮している。

「んんんにゃあああああああつ♥ら、ら、ら、らめええつ♥み、美奈斗ちゃん……し、締めちゃあ……やだよおっ♥も、もげちゃううううっ♥」  
「あ……ああ……ごめ、ごめんさいい……こ、興奮しちゃって……んんふうっ♥」  
「美咲のを感じ過ぎなんだよ……美奈斗の、その穴は、指が四本ぐらいい入るぐらいなんだからさあ」  
「お、お兄様あつ！ そ、そんなことお……い、言わないでえ……下さいいっ♥」  
「あはは……まあ、いいじゃないの。本当のことだし……でも、実際よく締まるいやらしい穴だつてことは、俺のチンポが分かつていることだからね」

んもお……お兄様のおバカあつ。  
姉さんまでニヤニヤしちゃうつてえ……ううう……は、恥ずかしいじゃないっ♥

「んにゃあ……機嫌直してよお、美奈斗ちゃん♥私い、美奈斗ちゃんもお、気持ちよくないとお……困るよおっ♥」  
「そ、そんなあ……ね、姉さん。い、いいんですよお……わ、私は……その、お、お兄様のお、物の言い

「うふふ……姉さん♥じゃあ……もつとお……気持ちよくしてくださいねえ♥」  
「んんにゃああううっ♥だ、だめえつ……し、締めたらあ……う、動かせないよおっ♥ら、らめえつ……な、中でえ……グーユグーユ……し、しちやあ……んんにゃあああああつ♥」

方が気に入らなかつただけで……ね、姉さんが楽しんでくれれば……  
「んにゅう……だからあ、もつとお、気持ちよくなつて……ねえつ♥」

ちよつとだけ姉さんには悪いと思つている。  
私は……ここで、姉さんを突き放そうと思つているからだ。  
私は……お兄様に選ばれた。  
それだけははつきりさせなくちゃいけない。  
だから、こうやって……お兄様の前でセックスしているのは、お兄様への意思表示だ。  
私は姉さんの立場も内包する——便所奴隷であろうと、何であろうと、私は……お兄様の妻なのだから。

「うふふ……姉さん♥じゃあ……もつとお……気持ちよくしてくださいねえ♥」  
「んんにゃああううっ♥だ、だめえつ……し、締めたらあ……う、動かせないよおっ♥ら、らめえつ……な、中でえ……グーユグーユ……し、しちやあ……んんにゃあああああつ♥」

姉さんを私は締め付ける。  
姉さんの与える快楽は快楽であり、私はそれを黙つて受け入れてもいい。  
でも、私は姉さんを逆に責める。  
そうしないと……私の中の「何か」が納得してくれないからだ。

「んにゃああううっ……み、美奈斗ちゃん……ど、どうしたのお？ きよ、今日はあ……激しいよおっ♥」  
「そんなこと……無いですよ。私は、私、同じですつて……」

そう言いながらも私は、私がイクまいと思いがら、姉さんのチンポだけを扱いていく。  
姉さんが「奴隷」なら……私は、今の私はただの「モノ」であるべきだ。  
そうでない……私の居場所は、ここには無い。姉さんとお兄様の間には、私は無いのだから。

「んんにゅう……美奈斗ちゃん、気持ちいいのお？」  
「え、ええ……気持ちいいですわ……本当ですよ」

「ほ、本当に……？」  
「ええ……見れば分かるじゃないですか。私は……いつもの私ですよ？」  
「……違う」

姉さんの腰の動きは、お兄様に比べて、全然稚拙です。でも、私を気持ちよくしようとしている心は分かります。  
私は、それを無視しているだけで。

「ほら……違う」  
「そ、そんなこと……」  
「んにゃあ……美奈斗ちゃんは、美奈斗ちゃんであつて欲しいなあ♥」  
「わ、私は、私のままですよ……」  
「違う。今的美奈斗ちゃんは違う……もつと気持ちよくくて、もつと楽しそう……もつと嬉しそうじゃなくちゃ……美奈斗ちゃんじゃないよお」

私の首に姉さんの腕が巻き付きます。  
私は、つい視線を逸らせてしまいました。

「んにゃあ……どうしたのかなあ。やつぱり……にいにいとのことお、怒つているのかなあ？」  
「そ、そんなことは……」  
「ううん。怒るのが普通だよ。私だつて怒るよ……だつてえ、嘔吐しているんだもん」

違う！ それで……怒っているわけじゃありません。違うんです。

「でも……嘔吐してるよお」  
「そ……それは……」  
「んにゃあ……じゃあ、どうしてえ……？」  
「そ……それは……」

分かつている。  
分かつていること。  
私は姉さんのようになれない……それだけ。  
姉さんが……羨ましい。

「……」

私は自分のことを考えた。だから、お兄様が子供を欲しいといつても拒絶した。でも、本当はお兄様の言いなりになりたい。姉さんのように……ただ、性のオモチャのように……ただ、快楽を貪りたいって。

「……………それは、違うよ」

「え……………ね、姉さん……………なんて」

「違うって言ったの。私、できてないよ……………そういう風にはできていない」

「だって……………し、してるしい、わ、私の前でも……………したじゃない」

「んにゅう……………それはねえ……………好きだからできるんだよお♡」

好きだからできる——そういうものだろうか。ああ、そういうものだ。

「そうだよ。でも、私が好きなのは、にいにいだけじゃないよお……………私は、美奈斗ちゃんもお……………好き♡」

「ね、姉さん……………」

「あのね……………私だって、本当は、全部できているわけじゃないよお。でもお、にいにいが好きだし……………にいにいのことなら、何だってできるって思っているの」

「……………」

「それからね……………私、やっぱり美奈斗ちゃんとも、にいにいとも、お別れしたくないの……………でも、邪魔もしたくないの」

「……………姉さん」

「邪魔しないように、でも、一緒にいられるように……………って思ったら、すっごくバカなこと、にいにいと言ったの……………それなら」

そうしたら、お兄様はそのバカな提案をあっさり受け入れてくれたのだ。

こういう意味で悪いのはお兄様だろう。でも、私も姉さんも、お兄様を恨むことはできない。私たちは好きで……………お兄様が好きだから、こうなってしまうのだ。

「だから……………美奈斗ちゃんに恨まれたり、憎まれたりするの……………しょうがないけど……………できれば、この……………この……………エッチの間だけでも、そういうこと……………」

……………忘れて欲しいんだ」

「……………バカね、姉さんは」

「んにゅうあ？ ば、バカなのは……………分かってるけれど……………」

「バカっていうのは、そういう話じゃなくて……………うふふ♡ もお、説明すると私がバカになっちゃうわ」

「んにゅう？」

私は姉さんから離れる。でも、すぐに姉さんのエッチな場所に跪き、そして……………快楽を与えるの。

「んにゅうああうう♡ ら、らめえつ……………み、美奈斗ちゃん……………だ、だ、ダメだよお♡」

「んふうつ……………姉さんってばあ、感じすぎねえ♡ ても、気持ちいいでしょ？」

「んにゅうう……………な、ナメナメえ、全然されてないからあ……………わ、分からないよお♡」

「うふふ……………私だって、知らないわよお♡ んん……………姉さんのお……………可愛い♡ こんな間近で見たこと無かったからあ♡ うふふ♡」

「んにゅうあ……………美奈斗ちゃんのお……………な、舐めていい……………いやらしいことお……………しよお♡」

そうして、姉さんは、私の股間に顔を埋めていきまます。私も姉さんと同じであらう、快楽を受けて、思わず顔を上げてしまいました。

「んんあああああ♡ な、何い、な、舐め……………のお……………こ、こんな……………いいのお♡」

「んにゅう……………イッた後お、にいにい舐められるのとお……………全然違うよねえ♡ もつともつとお……………チンポお、しゃぶる♡」

「わ、私も……………んんちゅう♡ んんちゅう♡」

姉妹でのシックスナイン——それも、ふたなりのチンポをしゃぶりつこする。こんなお……………ボーイズラブの男の子がするよう……………そんな変態行為。それをお兄様の前でしている……………私たち、姉妹。

「んんくうんん♡ お、美味しいよお……………こ、これ……………癖になっちゃうよお♡」

「んにゅうあ♡ 私もお……………これ……………これ……………いいよお♡ 美奈斗ちゃんのお……………チンポお♡、美味しい♡……………美味しいよ……………」

ちゅーちゅーと、私たちは互いのチンポを貪り合います。恥ずかしいっていう気持ちよりも、快楽の方が全然強くて……………頭がおかしくなりそうです。

「んにゅうあ……………いっぱい♡ いっぱい……………先汁……………出るよお♡ 美奈斗ちゃんも、いっぱい出してよお♡」

「う、うん♡……………こんなお……………エッチすぎる♡」

「これから……………もつともつとエッチしようね。美奈斗ちゃんもエッチしたいよお♡ だから……………」

「分かってる……………分かってます♡……………こ、こういうのお……………好きだって……………やっとお♡ やっとおお♡」

——素直になれました。自分では、とくに素直になっている……………そんなつもりでした。でも、私は、私のまま、何も変わっていないことに、今更気付いたのです。

「んにゅうあ……………ち、チンポお……………つ、使いたいよお♡……………い、いい……………美奈斗ちゃんに、チンポお、挿れたいよお♡」

「う……………うん♡……………いいよお……………姉さんに、犯されたいよお♡」

我慢しきれなくなった姉さんは、悲鳴のような声を上げて、体を入れ替えます。そして、泣きそうな顔を向けながら、もう一度私にセックスをねだるのです。

「んにゅうあ……………美奈斗ちゃんとお、ハメハメ……………したいよお♡」

「んふつ♡……………姉さんたら……………いいですよ♡ セックス……………ケツ穴あセックス……………したいですよお？ ほら……………してえ♡」

私は姉さんの前ではしたなくお尻の肉を広げ、そして粘膜を剥き出しにしていきます。でも……………それに反応したのはお兄様が先でした。

「美咲、先に俺……………いいかな？」

「んにゅうあ……………いいよお♡……………ふ、ふたりに……………美奈斗ちゃんハメハメしちゃうのお？」

「……………うん……………うん……………うん……………」





あッ  
あッ  
あッ

あッ  
あ  
あ  
あッ  
あッん  
くふう  
あッん  
あッ  
あッん  
あッ  
んや……  
はッ  
ひ……

しびれ  
……ちやれ  
……

きやう

姉さんのストロークが、早く、そして、長くなっ  
ていきます。臀部と姉さんのお腹が「ばちんっ  
ばちんっ♥」って鳴るほど勢いもあります。  
私は、髪をかきむしりながら、この行為に耐えま  
す。でも、ただ耐えることしかできない私には、限  
界がありました。  
それは……お兄様の行為で、あっさり崩壊してし  
まうのです。

「んじゃ……俺も、しちゃうよ」  
「んんんおとおお♥ だ、だめえっ♥ す、すぐ  
にい、す、すぐにい、しゃ、射精い、射精い、しちや  
いますううっ♥」  
「ふふふ……美奈斗の中がぐんぐん動くよ。気持ちい  
いんだろ……ほらっ」

お兄様がちよつとでも動く……それだけで、私の  
中に快感が、ドッ！と押し寄せてきます。  
射精感を我慢し、チンポ快感を我慢していた苦な  
のに……もお、すぐにい……で、出ちゃうううっ♥

「んんんああああおとおおおおお♥ ら、ら  
めええっ♥ らめええっ♥ で、出るううううっ♥  
ち、チンポおっ……チンポおおおっ♥」  
「んにやあああううっ♥ み、美奈斗ちゃん……そ、  
そんなにい、そんなにい、し、締めたらあつ……お、  
お姉ちゃんチンポおっ、も、もげちゃうよおおっ♥」

姉さんの悲鳴は関係ありません。だって、私の中  
での快感は限界に達していたのですから。

「んにやあああああつ♥ に、にいにい、い、イツちゃつ  
てえ……いいい？ いい？ んにやあああああつ♥」  
「わ、私もおっ……私もおっ……い、いき、イキます  
ううううううううっ♥」

——ぶびゅうううううううううううううううううう  
ううううううううううううううううううううううう  
ううううううううううううううううううううううう  
ううううううううううううううううううううううう  
びゆるううううううううううううううううううう  
ううううううううううううううううううううううう

「んあつ♥ んあああつ♥ んあああつ♥ しゅら、  
しゅら、しゅら……いいいい♥ ね、姉さんのお……  
姉さんのおっ……い、いっばいいい……いっばいいい

……な、流れ込んでえ……き、きてるうっ♥  
「んにやあつ♥ んにやあつ♥ んにやあつ……  
しゅら、しゅら……ま、まだあ……勃起い、み、美  
奈斗ちゃんの中でえ……勃起してられるうっ♥」  
「ふふふ……じゃあ、俺が美奈斗のオマンコを犯して  
あげるからな。美咲は続けて、ケツ穴射精しなさい  
……」

お兄様は姉さんを抜かずに、私の中から離脱しま  
す。そのまま、オマンコの方にチンポがねじ込まれ  
ていきます。  
その無茶な行為に、私は獣のように声を漏らすの  
でした。

「さあ……今日で美奈斗を孕ませてやるからな。たっ  
ぱりザーメンを飲むんだ」  
「は……あああつ……んんんおおおっ♥ お、お  
ま、オマンコおっ……ひ、久々あ……お、オマン  
コおおっ♥」

お兄様のチンポが、私の子宮口をゴリゴリと蹂躪  
していきます。何度も犯されたのに、この感触を忘  
れてしまうほど、今の私は普通じゃやないセックスに  
夢中だと思ひ知らされました。  
こんなのを……忘れてしまふほど、私……恥  
ずかしいことお、繰り返していたんです♥

「そうだよ……美奈斗は変態なんだよ。ケツ穴で、何  
回もイける女の子なんて、そんなにいるわけ無い  
じゃない。拳げう、オマンコアクメを忘れちゃうな  
んで……本当にどうしようも無い変態だなあ」  
「あううう……そ、そんなことお、い、言わないでえ  
……く、くださいいっ♥ わ、私だつてえ……忘れた  
くて、忘れたんじや……んんんおおおおおっ♥  
ら、ら、らめえっ♥ ね、姉さん……だ、だめえっ  
♥ ま、まだあ、は、はや、早いのおおっ♥」

「んにやあ……だ、だつてえ、だつてえ、お、お姉ちゃ  
んチンポお、ま、またあ、勃起してきたもんっ♥  
勃起してきてえ……気持ちいいからあ、パン  
パンするもんっ♥」  
「しょうがないなあ……俺はまだイッてないしな。  
たっぱりと美奈斗の子袋にザーメンを飲ませてやら  
ないと……な」

お兄様と姉さんの責めで、私は快感の地獄に墮ち

ていきます。  
涙は止まらず。  
呼吸はできず。  
口ははしたなく開き。  
舌を突き出して、絶頂をし。  
涎も、鼻水も、拭うことなく。  
勃起したふたなりチンポの痙攣は止まらず、何度  
も何度も空撃ちの絶頂で、先走り汁がザーメン以上  
に溢れていくのです。  
そうして、私の中で繰り返される絶頂感を、ふた  
りのチンポに支配されたまま、味わい続けていまし  
た。

「ふふふ……いい顔しているよ、美奈斗」  
「あ……ああ……そ、そんなことお……い、言われて  
もお、う、嬉しく……あ、ありませんわっ……ん  
んんんおおおおっ♥」  
「んにやあ……美奈斗ちゃん、すっごい感じてるんだ  
ねえ。お尻の中に挿れているチンポお、すっごいキュ  
ンキュンしてるからあ……分かつちゃうよおっ♥」  
「ね、姉さんまでえ……ああくうんんっ♥ んん  
んんんおおおおっ♥」

直腸と膣を分け隔てる薄い一枚の肉を挟んで、お  
兄様と姉さんのチンポが……私の快感中枢を責め立  
てています。  
ゴリゴリと肉壁を削り取られるたび、私はうねる  
ような絶頂感を味わい、牝の体液をほとばしらせて  
いくのです。

「ううう……いいよ、美奈斗お。オマンコお、イッて  
るのが……分かるよ。子宮まで震えているみたいに、  
すっごい感触だよ」  
「んにやあ……美奈斗ちゃんの女の子のお、イツちゃう  
とお……お尻の方までピンピンくるよおっ♥ もっ  
ともっとお、気持ちよくさせてあげるううっ♥」

あまりにも繰り返される快感のため、私は本当に  
イッているのか……分からなくなっています。私が  
確かに分かる絶頂感……最初の瞬間だけ。  
ドオンっとなる高波の衝撃だけで、後はずつと痙  
攣と脳を揺るがす快感の波を受けっぱなしになるの  
です。  
その波は、お兄様と姉さんの緩やかなストローク  
で、あつという間に平均化され、平常に戻ったよう



く放尿してきました。  
いくら、今、公衆便所扱いされているからって……  
いきなりの放尿はとでもきつかったです。  
それでも、私は今の自分の役目を知っているから、それをこなしました。そうする必要があったからです。

「ふふふ……ご苦労様。んじゃ、美奈斗を慰めてあげないとね……可愛い俺の妹、そして、俺の奥さんを」  
「んあううっ……絶対胎教に悪いですう」  
「そうだろうね。臨月間近の女の子を捕まえて、クラス中の男と輪姦なんて」  
「どうして……こんなことを？」

素直な疑問。  
私にはお兄様と姉さんがいれば、十分すぎる快楽だった。それなのに、お兄様はそれ以上の行為を施した。

姉さんは、自分がお兄様の奴隷であり、その便所奴隷の役割を実感していたから、十分すぎる施しだったかも知れない。  
でも、私は……ちよつと立場が違う。

「まあ、気紛れ……かな。でも、俺も男だったわけ……可愛い妹にして俺のモノが汚されるのを、見たくなつた……破滅願望なのかも」  
「んもお……本当に、しょうのない人ですね、お兄様は♡」

別に構わない。  
お兄様以外の男に犯されるのも。  
こんな風に公衆便所として扱われるのも。  
ただ、私と姉さんを、お兄様が愛し続けるなら。

「それは絶対大丈夫。俺はお前たちが好き。大好き。愛している。こんな軽い言葉しか出ないのが……本当に悪いと思っているけれど」  
「じゃあ、言わないで……黙って、態度で示してください」  
「うん、分かった」

お兄様の指が、私のアヌスに差し込まれる。いきなり……三本も。そのままグリグリと、中を掻き回していく。

「綺麗にしないと……美奈斗の中を。その方が嬉しいだろ……俺ので綺麗にしてやるから」  
「は……はいいっ……お、おね、お願いします♡」

男の子というのは、本当に不思議なもので、こういう状況だと容赦が無い。多分、一対一であれば、こんなことは無いのだろう。  
だが、誰かが責任を負い、しかも責任の所在が曖昧にあるような状況だと、こんなにも酷いことができるのだ、と分かった。

もちろん、その中にはお兄様も入っているわけだが……ただ、お兄様はそれでも責任を取る側だから、こんなことをしても許されるわけである。  
もつとも、その責任を追及するのは、私と姉さんしかないのが現状であるわけで。

「いっばい……出てきちゃったな。こんなに出されちゃったのか……」  
「ま、まだ……で、出てきちゃうとお……そ、そのお……あ、アレまでえ……出ちゃうう」

「ウンチしたいのか？」  
「い、いやあつ！ そ、そんな……こと……あ、あんなに綺麗にしたのに……で、出てくるわけ……無いじゃないですかあ」

「そっか……じゃあ、やっぱり異物挿入のせいだろうな。便意だけあるって感じだろ……気持ち悪いのか？」  
「うう……ちよ、ちよつとだけえ。お、お兄様のだったらあ……へ、平気なのに……」

お兄様は、私を再び抱きすくめ、キスをしながら、アヌスをこじ開けていきます。

「美味に吸って貰おうか？」  
「んっ……お、お兄様のお……変態♡♡ そ、それえ……興奮するけどお……姉さんは……」

姉さん——今、男の子は四人、あ、今、姉さんの髪にザーメンをぶちまけたから、三人になりました。  
ふたりの男の子は、姉さんの口とお尻を。もうひとりの男の子は、四つん這いになっている姉さんの中に潜り込んで……チンポをチュパチュパしています。

何度も、何度も絶頂する悲鳴が聞こえますが、男の子たちは止める気配がありません。それどころか、姉さんのチンポをしゃぶりたがっている子が増えて

きていて、周りでセンズリしながら待ちかまえているような状態です。

「あつ……ああつ♡♡ す、すっごい……姉さん……あんなに、犯されちゃって……」

「さすがにそろそろ限界だよな。あと、一巡したら、全員帰そう。そうでないで、ふたりとも俺が負ぶつて家に帰るハメになりそうだ」

「うふふ……さっき気絶したのに、おしっこかけて無理矢理起こした人の言葉とは思えない優しい言葉ですね、お兄様っ」

「悪かったな……でも、ふたりとも俺の小水だと思つたら嬉しそうな顔して、ホント……いやらしくなっちゃったよなあ」

お兄様のモノであれば、何だつて私たちの快楽に還元されてしまうのです。それを姉さんを通して理解して本当に良かった。

「俺も、ふたりのだったなら、何だつて受け入れられるよ……可愛い妹だもの」  
「じゃあ……犯して……くださいいっ♡」

私はお兄様にしがみつきます。

そして、キスをねだります。

お兄様は、それに簡単に応えてくれました。

それから——他の子たちを帰すことにしました。後の時間は……私たちだけの時間。

文句が出たり、無理矢理私たちを続けて犯そうという人が出てくるんじゃないか、と思つたのですが、意外にみんな素直でした。

「当たり前だ。お前たちが丈夫すぎて、結構みんなキテいたぞ」

「んにゃあ……そ、そうかなあ。いっばい……いっばい……出されちゃってえ……よく分からなかつたよ♡」

「ん……姉さん……べとべと♡」  
「んにゃあ……い、いいよおっ、な、舐めないでえ……いいよおっ♡♡ は、恥ずかしいよおっ♡」

「私だつて……ほらあ、恥ずかしいことお、いっばいされちゃったんですよおっ♡」

私は姉さんの手を取り、股間へと導く。  
姉さんはザーメンをよく掛けられていたみたいだ



はあ

は……

あッ

はあ

んや……

けれど……私は泣いても叫んでも、お願いしても、容赦なくアヌスの中に流し込まれたのです。

「んにゅう……じゃあ、美奈斗ちゃんの中……私が綺麗にするよ♥」

「あ……やあつ……ね、姉さん……だ、だめえつ♥」  
「ふふふ……分かってるじゃないか、美咲い。そうだ……美咲は美奈斗にどつかめて欲しいか？」

「お、お兄様……そ、そんなのお……」  
「んにゅう……い、いいのかなあ……いいのかなあ？ いいならあ……して……欲しいのがあるよおつ♥」

姉さんは泣きそうな顔になりながら、私に訴えかけました。

「ち、ち、チンポお……しゃ、しゃぶつてえ♥」

「ね、姉さん……」

「んにゅう……だ、だつてえ、お、男の子たち、最低にへたくそなんだもんつ。美奈斗ちゃんのお、優しくつてえ……すつごく気持ちいいんだよおつ♥ だからあ……お願いいっ♥」

私は黙って姉さんにキスしました。

そして、姉さんの下半身に顔を寄せて行きます。姉さんもまた、私のお尻の方に唇を寄せます。

「んにゅうあうつ♥ ま、前のお、しゃ、しゃぶりつこにい、似てるよお♥ いやらしいよおつ♥」

「うふふ……姉さんのチンポお、赤く腫れちゃつてえ、酷く舐め回されたのね」

「んにゅうあうつ♥ そうだよお……優しくないんだもんつ、不愉快だよおつ！

「じゃあ、優しくしゃぶつてあげるね……可愛そうな姉さんのチンポおつ♥」

たつぷりと唾液を含ませて、私は姉さんのチンポを口に含ましました。同時に私のアヌスに、舌が差し込まれていきます。同時に私のアヌスに、舌が差し込まれていきます。同時に私のアヌスに、舌が差し込まれていきます。同時に私のアヌスに、舌が差し込まれていきます。

「んああうつ♥ ね、姉さん……」  
「だ、だめえ……美奈斗ちゃん、もつとお……しゃ、

しゃぶつてえつ♥」  
「うん……分かったあ♥」

私はジュルジュルと音を立てて姉さんのチンポをフェラチオしていきます。

私が唾液を吸るたび、姉さんの身体が震え、跳ね上がります。

「んふうつ……ね、姉さん……わ、私のもおつ♥」

「んにゅう……味濃くてえ……すつごいよおつ♥ くれえ……あ、頭あ、ば、バカになつちゃうよおつ♥」

「ふふふ……んじや、そろそろ、俺も楽しませて貰うよ。んじや、美咲を先にしちゃうつてあげるね……」

「んにゅうああうつ……あ、赤ちゃん、こ、壊さないでえ……んにゅうあうつ♥」  
「大丈夫だつて……だつて、こつちに挿れるから」

そうしてお兄様は、姉さんのアヌスに……ペニスを埋没させるのです。

「んにゅうあああああうつ♥ ら、らめえつ♥ らめえつ♥ あ、穴あ……け、ケツ穴あつ♥ ら、

「さすが……さつきまで犯されていただけあつて、柔らかくなつて……気持ちいいよ」

「んにゅうあうつ♥ だ、だめえつ♥ お、おし、お尻い、穴あつ♥ 穴あつ♥ こ、こんなにい……お、おつきいのお……に、にいにいのおつ……すつごいのおつ♥」

「うふふ……姉さんも、やつぱりお尻感じるのね……私たちい、やつぱり双子なのねえ」

「んにゅうあうつ♥ そ、そんなのお……か、感心しないでえ♥ んにゅうああああうつ……ち、チンポおおつ♥ チンポもおつ……んにゅうあああうつ♥」

私は姉さんのチンポを思いつき刺激しました。だつてえ……びっくんびっくん震えて、いっぱいいっぱい先走り汁出しているんですものお♥

そんな状態で、黙って見ているのつて……ちよつとナンセンスです。

だから、思いつきしゃぶりしました。歯だつて立てて……ゴリゴリ噛み締めたりしちゃうつて、姉さんが興奮して、声を出すのがとつても気持ちいいです。

「んにゅうああうつ……ひ、酷いよおつ♥ ち、チンポおつ……も、もげちゃうよおつ♥」

「ふふふ……美奈斗の方を気持ちよくしてあげないからだよ……ケツ穴を舐めながらチンポを手扱きしてご覧」

「お、おに、お兄様あつ！ んにゅうあああおおおおつ♥ ら、らめえつ！ んにゅういっ……ね、姉さんつ……だ、だめえつ♥」

「美奈斗ちゃんだつてえ……ダメつてえ……言ったのにいっ……止めてくれなかつたじゃないいっ♥ んんちゅう……お尻い、ユルユル♥ チンポお、いっぱい挿れられて……パンパンされたんだあ♥」

姉さんの指が私の直腸の中でグリグリと掻き回されていきます。でも、姉さんの動きはすぐに鈍くなります。何故なら……姉さんはお兄様にも犯されているから。

「んにゅうああうつ♥ み、み、美奈斗お……ちゃんんつ♥ もお……お、おね、お姉ちゃん……が、我慢……できないよおつ♥」

「どうしたいのお……姉さんはあ♥」

「お、お腹あ……赤ちゃん、いるからあ♥ お、おま、オマンコハメえ……で、できないけれどおつ♥ え、エツチい……し、したいよおつ♥」

「要するに、姉さんがしたいのは……これよね♥」

私は自分の勃起したチンポを姉さんのチンポに押しつけました。

この間まで、絶対に慣れないと思つていたのに、今では、このエツチが大好きです。

チンポ同士のエツチい……んああうつ♥ ゴリュゴリュつてえ……き、き、気持ち……いいよおつ♥

「んにゅうあああうつ♥ そ、それえ……それえつ♥ それだよおつ♥ んにゅうああああうつ……いよおつ♥ いいよおつ♥ ち、チンポおつ……いいよおつ♥」

「ふふふ……すつかり、ふたりともチンポ快楽が好きになつたみたいだな」

「あうつ……お、お兄様あ♥ だ、だつてえ……ど

びゅうつてえ、出るとお……す、すつごいんですうつ♥ 腰い、抜けるみたいにい、気持ちよく

「んああうつ♥ ね、姉さん……」  
「だ、だめえ……美奈斗ちゃん、もつとお……しゃ、

「ええ……」  
「んんにゃあ……美奈斗ちゃんのお、ドックンドックンしてのお……分かるよお♥ 興奮……してらんだよねえっ♥」  
「そうですよお……お兄様に見られながら、ね、姉さんとお……チンポエッチイしているのお、み、見られるのお……す、好きいいっ♥」

男の子たちに陵辱され切ったメスチンポは完全に剥けてしまい、いきなり裏筋や包皮の裏側で、ゴリユゴリユ合うことになっていきます。  
あれだけ責め立てられたのに、新しい先走り汁は激しく吹き出し、私と姉さんの性行為の大切なローションになって、楽しませてくれます。

「んんにゃああうっ♥ ち、ち、チンポお……チンポお……いいよおっ♥」  
「わ、私も……す、好きいいっ♥ ね、姉さんの方が……感じてみたいっ♥ やっぱいい……穴ハメされちゃつてるとお……感じるのっ♥」  
「うんっ♥ うんっ♥ か、かん、感じるう……いい、動くのゆっくりだけれどお……き、気持ち……いいよおっ♥ ち、チンポにい、ひ、響くよおっ♥」  
「うんっ♥ 羨ましいなあ……お兄様あ、姉さんが終わったら……わ、私もお、お、同じのお、し、したいですうっ♥」

「あはは……双子だもんね。美咲のケツ穴もだんだん美奈斗みたいに濡れるようになってきたよ。このままだと、オムツブレイでお漏らしとか、オムツ内射精とか……美奈斗がどんな恥ずかしいことしているのか、教えられそうだよ」  
「やあ……そ、そんなのお、は、恥ずかしい。だ、だめえ……あ、ああいうのお……私とだけえ……して欲しいですうっ♥」

「それどころか……美咲にもアナルフィストとかできそうだよな。そうなったら、ふたりとも俺の手でケツ穴イカせながら、チンポで愛し合うっていうこともできるぜ」  
「んんにゃあああ……だ、だめえっ……お、おし、お尻い……こ、こわ、壊れちゃうっ♥」  
「わ、私も……い、幾らあ、こ、こなれてるからつてえ……そ、そ、そんなのお……た、耐えられませんっ♥」

でも、姉さんも、私も、熱っぽい視線の向こうでは、そうなつてしまつた時を想像する。  
直腸内を指で、掻き回され、腸壁さえ驚掴みにされるようなハードプレイ。  
同じ目に遭っている双子の姉。  
射精のように吐き出される先走り汁。  
ヌルヌルになった包皮を、互いのチンポだけで剥き合い、ついには射精に至る。  
それでも、お兄様は満足せず、手をお尻の中ねじ込んで、出し入れし始める。  
私も……姉さんも……狂つたように、声を出し、絶頂失禁しながら、再びチンポを押しつけ合う。

「んんにゃあうう……あううっ♥」  
「くうんっ……んふうっ……んふうっ♥」  
「ふふふ……ふたりとも、そんなに興奮して、もお、互いにやってみたいっと思っているのかな？」  
「そ……そんなこと……」  
「な、無いですう……」

言葉に力はない。  
お兄様の動きは速かった。

「んじや、予行しちゃうかなあ……ふたりの希望を受けてさ」  
「んんにゃああううっ……だ、だめえっ♥ あ、あか、赤ちゃん……赤ちゃんいるのにいっ……こ、こんなあ……へ、変態さんなのっ♥」  
「だ、だめえっ♥ お、おに、お兄様あつ……い、今、今、ほ、ほじられたらあつ……す、すぐに、すぐに……イッちゃいますううっ♥」  
「じゃ、最初の一回だからね……まだ、俺とのセックスはしてないからさ……これは、俺のワガママ」

そうして、お兄様は私たちを抱き寄せて……お尻に指を、手を這わせました。  
私も、姉さんも、互いの熱っぽい視線を感じ、乳房を、乳首を重ね、チンポを押し付け合い、そして……唇を重ねました。  
私も姉さんも、後悔していません。  
自分の愛している人に、愛されるようにして、その結果がこれなのですから……何も文句は言えませんが、惜しむらくは……私たちの心がそんなに強

くないことと、私たちのお腹の中にいる子供には、絶対に理解できないこと。それが残念でなりません。  
でも、それでいいのです。  
お兄様を愛しているのは……私と姉さんだけでいいのですから。  
だから、生殖の伴わない、神への冒険的なセックスが好きなのだ……私は思つたのです。  
子供が女の子だったら、きつとお兄様を取られる。子供が男の子だったら、きつとお兄様を捨てる。  
そんな恐怖もあつたから……でも、今は、そしてこれからも、関係ないでしょう。  
何故なら……今、私は、双子の姉と共に、最高のセックスの最中にいるのですから。  
私の思いが姉さんと同じかどうかは分かりませんが、でも、お兄様の指三本が挿入され、ゴリゴリと扱かれた瞬間、私たちは同時に絶頂しました。  
激しい精液の奔流に、私も姉さんもキスしたまま声を漏らし、互いに歓喜のハーパーモニーを漏らしていたので……きつと同じだと思えます。  
このはしたない、この最低な、この忌まわしい……想いも、ふたりだったら受け止められると、私は確信して、更なる絶頂を迎えたのでした。

[d n e]

こんにちわ。武藤礼恵です。

今回も XANADU の作品『シス×みこ』の外伝的を書きました。

夏コミの後、どうしようかなあ、と迷っているとやっぱり書いて！ というファンの声が聞こえてきたので、書きました。

うーん……でも、苦勞した。正直、この命題は難しかった。

ただ、書くのは簡単だけれど、前のアレを含めて何かオチを考えないと……ということで、まあ、こんな風になりました。

もう少し勉強したいです、はい。

来年も早い内からゲームの仕事で大変ですが、何とか上半期に2本は出したい所があります。下半期にはそうねー大作とかやりたいよねー。

ということで、皆さん今後とも応援宜しく願いいたします。

今回は、出し忘れが無く、かつ受かっていればキャッスル、1月サンクリは申込みを忘れたので……うーむ。

では、また次回。

■ おくづけ ■

発行：楓のはらわた

著者：YUKIRIN & 武藤礼恵

2005年12月30日発行

印刷：ニモ印刷工房

■ 連絡 ■

muto\_rei@ro.bekkoame.ne.jp

<http://www.kaede-no-harawata.com/>

code:sheseemikosis